多度津町内遺跡発掘調査報告書１

南　鴨　遺　跡

平成 24 年度多度津町内で実施した遺跡調査報告

2014.3

多度津町教育委員会

序

多度津町の南鴨地区は多度津町の西部に位置し、丸亀市とも隣接する地域で、現在は宅地開発が進み、人口増加をしている地域です。古くからこの周辺は拓かれた地であったことは弥生土器や須恵器などが採集されていることが物語っています。さらに遍路道も近くを縦断する、歴史文化が今も色濃く残った地域でもあります。その中でも南鴨遺跡は町内の遺跡の中では最大規模の範囲を持った遺跡です。近年では南鴨遺跡の周辺では、隣接する丸亀市のベッドタウンとして、宅地開発が多数行われるようになり、それに伴い、本年は多くの確認調査が行われました。

今回は南鴨遺跡の周辺で行われる開発行為に先行して、遺跡の調査を実施しました。調査では溝状遺構の中から多くの瓦器や出土、錘や蛸壺などの漁撈具も出土し、そのことから交易や生業などの面からも海に隣接する遺跡としての様相が明らかになってきました。

本報告書が、香川県の考古学・歴史研究の資料として広く活用されますとともに、埋蔵文化財に対する理解と関心が一層深められる一助となれば幸いです。

最後になりましたが、この発掘調査を実施するにあたり、ご指導いただいた香川県教育委員会生涯学習・文化財課をはじめとする関係各位並びに多大なご協力をいただきました発掘調査地所有者の方々に厚くお礼申し上げますとともに、発掘調査及び整理作業に従事下さいました関係者の皆様方に感謝申し上げる次第です。

平成 26 年 3 月
多度津町教育委員会
教育長　　田　尾　　勝

例　　言

１．　本書は、多度津町教育委員会が平成 24 年度に実施した、多度津町内遺跡立会調査の報告書である。

２．　本書で報告する遺跡は南鴨遺跡で香川県仲多度郡多度津町大字南鴨に所在する。

３．　発掘調査は多度津町教育委員会が調査主体となり、多度津町教育委員会教育課が担当した。

４．　調査にあたっては次の方々･関係機関の協力を得た。記して謝意を表したい。（順不同、敬称略）

徳島文理大学 大久保徹也、香川県教育委員会生涯学習･文化財課 森下英治、松本和彦

香川県埋蔵文化財センター、多度津町建設課・産業課・総務課

５．　報告書の作成は、多度津町教育委員会教育課社会教育係・白木 亨が担当した。

６．　報告書で用いる方位は指針方位で示した。標高は東京湾平均海水面を基準とした。

７．　遺構は次の略号により表示した。

ＳＢ：掘立柱建物　ＳＡ：柱列　ＳＰ：柱穴跡　ＳＤ：溝状遺構　ＳＫ：土坑　ＳＥ：井戸跡

ＳＸ：不明遺構

８．　挿図の一部に国土交通省国土地理院発行の１／２５，０００地形図を使用した。

９．　遺構断面図の水平線上の数値は、水平線の標高値（単位：m）である。

１０．土器観察表中、あるいは土層断面図内の色調は、農林水産省農林水産技術会議事務局監修・財団法人日本色彩研究所色票監修『新版 標準土色帖 1992 年度版』を参照した。胎土中の砂粒の「粗」は径４mm以上、「中」は 0.5mm以上、「細」は 0.5mm未満を基準とした。

１1．出土遺物の記述･年代観・観察表の作成については各研究者のご教示や、下記文献を参考にした。

「庄八尺遺跡」『県道多度津丸亀線道路改築事業(多度津工区)に伴う埋蔵文化財発掘調査報告』香川県教育委員会 2009

「川津元結木遺跡」『中小河川大束川改修工事(津ノ郷橋～弘光橋間)に伴う埋蔵文化財発掘調査報告』香川県教育委員会 1992

本 文 目 次

第１章　調査に至る経緯と経過

第1節　調査にいたる経緯 …… 1

第2節　調査の経過 …… 1

第3節　調査・整理体制 …… 2

第２章　遺跡の立地と環境

第1節　地理的環境 …… 3

第2節　歴史的環境 …… 3

第３章　調査の成果

第1節　調査区の概要と層序 …… 8

第2節　遺構と遺物

第1項　中世以前 …… 11

第2項　近世以降 …… 18

第3項　包含層・撹乱出土の遺物 …… 18

第４章　総括 …… 19

挿 図 目 次

第１図　遺跡位置図 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 1
第２図　周辺遺跡位置図　(1/60,000) ・・・・・・ 5
第３図　調査区割図（1/1,200）　・・・・・・・・・・・ 8
第４図　1～12 区遺構配置図(1/600)　・・・・・・ 9
第５図　6・7・9・10・11 区 遺構配置図
　　11 区南壁断面図(1/150) ・・・・・・ 10
第６図　13 区　平面図（1/100）
　　断面図（1/60）・・・・・・・・・・・・ 11
第７図　14 区　遺構配置図(1/100)　・・・・・・ 11
第８図　SB01　平面図･断面図(1/50) ・・・・・・ 12
第９図　SB02　平面図･断面図(1/50) ・・・・・・ 12
第 10 図　SD03　平面図･断面図（1/40）
　　SD04　平面図（1/40）　・・・・・・・・・ 14
第 11 図　SD12　断面図（1/40）　・・・・・・・・・ 16
第 12 図　SD14　断面図（1/40）　・・・・・・・・・ 16
第 13 図　SE01　平面図･断面図(1/40)　・・・ 18
第 14 図　SD01　出土遺物（1/3）　・・・・・・・・ 21
第 15 図　SD03　出土遺物１（1/3）・・・・・・・・ 21
第 16 図　SD03　出土遺物２（1/3）　・・・・・・ 22
第 17 図　SD06　出土遺物（1/3）　・・・・・・・・ 22
第 18 図　SD10　出土遺物（1/3）　・・・・・・・・ 23
第 19 図　SD12　出土遺物（1/3）　・・・・・・・・ 23
第 20 図　SD14　出土遺物（1/3）　・・・・・・・・ 23
第 21 図　SX01　出土遺物（1/3）　・・・・・・・・ 24
第 22 図　SX05　出土遺物（1/3）　・・・・・・・・ 24
第 23 図　撹乱･包含層等出土遺物（1/3）・・・ 25

表 目 次

第１表　周辺遺跡一覧 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 6
第２表　土器観察表 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 26
第３表　石器観察表 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 29
第４表　金属器観察表 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 29

写 真 図 版 目 次

図版１　　3 区　SE01　西から
図版２　　5 区　SD03　南から
図版３　　7 区　SD10　南から
図版４　　11 区　SA03　東から
図版５　　14 区　SD14　東から
図版６　　出土遺物（S-1 石製紡錘車）

第１章　調査に至る経緯と経過

第１節　調査に至る経緯

多度津町の埋蔵文化財は、ここ数年の香川県埋蔵文化財センターによる県道事業にかかる調査でいくつかの発掘調査が行われるようになってきた。

当町においても町内遺跡の把握をすることにより、今後の開発行為に対応するための資料を作成していくことが必要となっている。そして平成 24 年度から民間の開発事業により、町内の埋蔵文化財包蔵地を調査する機会が増え始めた。遺跡の広がりを確認する上で、同年度中に確認調査を実施し、その上で開発業者と協議の上で、掘削による遺構の破壊の範囲が狭小であるため、工事立会を行い、その成果を本文中に収録した。

第２節　調査の経過

平成 24 年度の工事立会は多度津町教育委員会が調査主体となって、対象は南鴨遺跡の 374.87 ㎡で平成 24 年７月 19 日から７月 31 日までを多度津町教育委員会教育課森泰憲が実施し、平成 24 年 12 月 14 日、平成 25 年１月 10 日、同年１月 15 日から平成 25 年１月 17 日までの２回を同教育課文化財専門職員白木亨が実施した。

整理作業は平成 24 年 10 月 23 日から平成 26 年２月 28 日まで多度津町教育委員会で行った。

第1図　遺跡位置図

第 3 節　調査・整備体制

調査・整理体制は以下のとおりである。

平成 24 年度
多度津町教育委員会教育課
　課長　　矢野修司
　社会教育係
　　副主幹　　森 泰憲
　　主事　　大西貴子
　　主事　　土井直人
　　臨時職員（文化財専門職員）　白木 亨

平成 25 年度
多度津町教育委員会教育課
　課長　　矢野修司
　社会教育係
　　副主幹　　森 泰憲
　　主事　　大西貴子
　　主事(文化財専門職員)　　白木 亨

調査に関わった方々は次のとおりである。
発掘作業員：今井由佳　小畑有美子　越智広二　倉本隆弘
　　坂本公男　高嶋保則　田中澤次　横田茂夫
また整理作業では職場体験活動の一環として、遺物の洗浄を多度津町立四箇小学校と多度津町立多度津中学校の生徒に協力いただいた。

第２章　遺跡の立地と環境

第１節　地理的環境

南鴨遺跡は丸亀平野の北西端部の平地上に立地する。

遺跡の立地する丸亀平野北端部は土器川や金倉川、弘田川などの複数の河川の沖積作用によって形成された扇状地形の末端部で、南鴨地区の中には湧泉となっている地点がいくつも見られる。また、金倉川の氾濫原に隣接することから、旧流路の痕跡がいくつも見られる。そこから北側に向かっては海岸平野の平坦な部分に接続する地域である。そのため遺跡のベース層は縄文海進時の汀線上に隣接することから、海洋性の堆積と河川堆積による砂層が分厚く堆積しており、地点によってはその中に縄文晩期の土器を内包することもある。その上層には古代以前に河川が氾濫することによって形成された砂礫層が氾濫流路周辺を覆っている。その後の河川堆積で特に金倉川の河岸には低位の段丘を形成しており、小規模な崖線を形成した河岸段丘背後の低位段丘上に遺跡は立地している。

第２節　歴史的環境

旧石器時代・縄文時代

香川県内においての旧石器時代の様相は五色台や庄内半島で比較的多く、石器や石器製作に伴う剥片などが確認されている。多度津町内も庄内半島がある三豊市に隣接することから、この時代の遺物が出土することが期待されるが、その資料数は乏しいのが現状である。その中でも町域西部の白方地区にある西白方瓦谷遺跡においてナイフ形石器の可能性がある石器が出土している。

縄文時代においてもその資料数は少ない。出土例は西白方瓦谷遺跡で中期の円弧文系ものが出土し、また小片ではあるが、晩期段階の突帯文系の土器片が表採されている。弘田川の上流域の善通寺市旧練兵場遺跡では、縄文時代晩期の土坑や縄文晩期の突帯文系の土器が確認されているため、下流域に当たる多度津町内においても、西白方瓦谷遺跡のように縄文海進が及んでいない範囲などで縄文時代の遺構が展開することが、今後の調査等で明らかになるのではないかと期待される。

弥生時代

町域の南側には、善通寺市にもその範囲が含まれる桜川流域に三井遺跡があり、ここでは弥生時代前期の遺構が確認されている。また、三井遺跡から東側の葛原地区にある小塚遺跡では、弥生時代終末期以降の溝状遺構が確認されている。さらに、弘田川の下流域である白方地区の奥白方中落遺跡は、鉄器や石器の生産を窺うことができる中期後半から後期にかけての集落遺跡である。西白方瓦谷遺跡でも、中期後葉と後期後半段階に集落を形成していた。また、白方地区の山麓部や町域東部の中又遺跡や中又北遺跡、南鴨遺跡、沿岸部の木下遺跡などでは遺構を伴わないものの、中期から後期にかけての土器や石器が出土している。

多度津町内においては三井遺跡のように前期のみ確認されているものがあり、町内にはまだ前期段階の遺物を内包する遺跡がある可能性がある。ただし、現状では中期後葉以降に弘田川流域で集落が顕在化したと推定するに止まる。また、町域の東部の遺跡で遺物が表採されるのは、生産域として人間の手が加え

られてはいるものの、あくまで生活の中心は、町域では善通寺市との境界をまたぐ三井遺跡や西側の白方地区などのやや内陸の微高地や山地丘陵の台地上地形に偏り、多度津町より内陸部の善通寺市内の旧練兵場遺跡が中期以降にその規模を増して、集落形成がさらに内陸化していく段階まで多度津町内の集落も若干の隆盛を示したのだろう。そして後期以降になっても海に隣接する立地のため、規模はある程度縮小された状態ではありながら、集落として続いていくと考えられる。

古墳時代

町内で確認されている集落は、今調査区の南鴨遺跡において初期須恵器を出土したという事例があり、古墳時代中期以降の集落の展開をうかがうことができる。また奥白方中落遺跡や中東遺跡などでは、周辺にある旧河道横の微高地上に弥生時代の後期から継続する集落が、古墳時代の初期段階まで続いていた可能性がある。さらに、西白方瓦谷遺跡では終末期段階の住居が確認されている。

古墳は、古墳時代全時代において地形的に多度津町の山地が白方地区に集中しているため、町域の西側に偏在する。多度津町内の古墳は前期段階から築造されており、首長墓クラスのものでは白方地区に前方後円墳の黒藤山 4 号墳や御産盥山古墳などがある。特に、黒藤山 4 号墳は前期段階までは確認できる奥白方中落遺跡の集落と直接的な関わりがあることが考えられる。そして、中期段階になっても白方地区の黒藤山を中心に山地上に黒藤山古墳群や経尾山古墳などが形成されるが、一部平野上に盛土山古墳や中東古墳群が造られた。墓域が下がってくるため、周辺に中期段階の明確な集落は確認されていない。後期段階でも古墳の立地は白方地区に偏る。古墳は天霧山や黒藤山、本台山の山腹や丘陵部の末端、山の斜面端部にあり、向井原古墳や向山古墳、宿地古墳、北ノ前古墳など、小･中規模の横穴式石室を有する古墳などが挙げられる。

前期の御産盥山古墳は弘田川河口部の入り江を望む立地であり、その他も入り江に流れ込む弘田川の河川流域を囲むような立地である。この地には堀江津以前の古代初頭まで続く賀富羅津（旧多度津）のあったところとされており、古墳の立地が特にこの地に集中しているのは、古代以前の港と密接に関わっているのは間違いないだろう。集落も西白方瓦谷遺跡や奥白方中落遺跡、中東遺跡など弘田川周辺に偏在しており、盛土山古墳や中東 1 号墳等平野部に立地する中期段階の例外もあるが、基本的には河川に展開する集落、そしてそれを見下ろすような立地で古墳が群立する関係が、古墳時代全体を通して多度津町の西部の古墳時代の状況である。

それに対して、町域の東部は遺構の密度も薄弱で、南鴨遺跡から初期須恵器が確認されたといっても遺構を伴うものではない。遺構の量の多さで言えば、善通寺市との境界にある小塚遺跡では先行する弥生時代末期から続く溝状遺構が古墳時代の初頭まで残るが、その中には大量の土師器が埋納しており、今回の調査でも遺構に伴わない古墳時代の土師器や須恵器の小片は見られるが、あくまでこの地域は古墳時代の段階では田圃などの生産域として展開したのだろうと考えられる。

古代

古代における南鴨遺跡は多度郡の北東部にあり、那珂郡との推定郡境に隣接する。古代となると条里地割がよく挙げられるが、多度津町内においても条里プランに沿った約 30°南西に傾いた溝状遺構が確認されている。南鴨遺跡に近いところでは、庄八尺遺跡では 9 世紀代の溝状遺構が、奥白方南原遺跡では中世段階の改修もあるものの、周辺の遺構から 8 世紀中ごろ開削された溝であると考えられる。溝状遺構

第２図　周辺遺跡位置図(1/ 60,000)

番号	遺跡名	時代	形態・種別	所在地	番号	遺跡名	時代	形態・種別	所在地
1	向井原1号墳	古墳時代後期	古墳(横穴石室墳)	奥白方向原162-1	52	いかり塚	中世	塚(墓)	青木石橋672
2	向井原2号墳	古墳時代後期	古墳(横穴石室墳)	奥白方向原162-2	53	願成寺	中世	寺院	土井畑1147-1
3	盛土山古墳	古墳時代中期	古墳(円墳)	奥白方片山121	54	五段岡碑	中世	その他	土井畑1144-2
4	中東1号墳	古墳時代中期	古墳(方墳)	奥白方中東1328	55	観音堂跡	中世	寺院	庄羽称坪78
5	中東2号墳	古墳時代中期	古墳(帆立貝？)	奥白方中東1322	56	公徳寺跡	中世	寺院	山階寺角750
6	寺前古墳	古墳時代	古墳	奥白方寺前1376-14	57	田中大明神	中世	その他	青木金道294
7	北ノ前古墳	古墳時代後期	古墳(横穴石室墳)	奥白方北ノ前1050	58	三井遺跡	弥生時代前期	包蔵地(集落)	三井樋の口
8	経納山古墳	古墳時代中期	古墳(円墳)	西白方瓦谷997	59	笠屋遺跡	弥生時代	包蔵地	庄508～511
9	御産盥山古墳	古墳時代前期	古墳(前方後円墳)	西白方西山997-7	60	向山1号墳	古墳時代後期	古墳(円墳)	東白方向山616-2
10	経尾山1号墳	古墳時代中期	古墳(円墳？)	西白方西山	61	向山2号墳	古墳時代後期	古墳(円墳)	東白方向山616-2
11	黒藤山1号墳	古墳時代中期	古墳(円墳)	奥白方黒藤	62	経尾谷1号墳	古墳時代後期	古墳(円墳)	西白方西山
12	黒藤山2号墳	古墳時代中期	古墳(円墳)	奥白方黒藤	63	経尾谷2号墳	古墳時代後期	古墳(円墳)	西白方西山
13	黒藤山3号墳	古墳時代	古墳	奥白方黒藤	64	東北浦古墳	古墳時代中期	古墳(前方後円墳)	奥白方東北浦1501-14
14	黒藤山4号墳	古墳時代前期	古墳(前方後円墳)	奥白方黒藤1552-1	65	陶窯跡	古墳時代後期	窯跡	奥白方黒藤
15	黒藤山5号墳	古墳時代中期	古墳	奥白方黒藤1558	66	鳥越3号墳	古墳時代	古墳(円墳)	見立犬尾2258-35
16	西山古墳	古墳時代	古墳(円墳？前方後円墳)	奥白方荒693	67	鳥越2号墳	古墳時代	古墳(円墳)	見立犬尾2258-25
17	弥谷山古墳	古墳時代	古墳	奥白方八国165-10	68	薬師堂跡	中世	寺院	山階岡山1475,1476
18	黒戸山古墳	古墳時代前期	古墳(円墳)	奥白方箕の手1598-5	69	有経塚	中世	塚(墓)	青木宿地928-2
19	古見立古墳	古墳時代	古墳	見立大見立1598	70	鳥越1号墳	古墳時代	古墳(円墳)	見立犬尾2258-18
20	唐戸1号墳	古墳時代	古墳	見立唐戸2430	71	天霧城跡	中世:	山城　城館	奥白方天霧、八国
21	唐戸2号墳	古墳時代	古墳	見立唐戸2392	72	舟(船)岡山遺跡	弥生時代中期～後期	包蔵地(集落)	山階岡山1477,1476
22	唐戸3号墳	古墳時代	古墳	見立中島2240-1	73	八王子古墳	古墳時代	古墳	奥白方字八王子331
23	西谷古墳	古墳時代	古墳	東白方西谷	74	朝日山古墳	古墳時代	古墳	奥白方字北原1142
24	鳥打古墳	古墳時代	古墳(円墳)	東白方鳥打	75	木下遺跡	弥生時代	包蔵地	本通1丁目乙210-1
25	徳公塚古墳	古墳時代中期	古墳(円墳)	東白方西谷44	76	浜遺跡	縄文･弥生	包蔵地	見立浜
26	宿地古墳	古墳時代後期	古墳(横穴石室墳)	青木宿地802-1	77	中東3号墳	古墳時代中期以降	古墳	奥白方中東
27	桑木古墳	古墳時代	古墳	山階池の内1575	78	西村塚1号墳	古墳時代	古墳	山階字西村1928
28	転石古墳	古墳時代	古墳(円墳)	青木転石1025-2	79	西村塚2号墳	古墳時代	古墳	山階字西村1928
29	鬼塚	中世	塚(墓)	栄町1-1-82	80	来付1号墳	古墳時代	古墳	山階字来付1128-2
30	野津古塚	中世	塚(墓)	影浦87(桃陵公園内)	81	来付2号墳	古墳時代	古墳	山階字来付1138
31	親王1号塚	中世	塚(墓)	堀江211	82	前山塚古墳	古墳時代後期	古墳(円墳)	東白方東谷
32	親王2号塚	中世	塚(墓)	北鴨1-3-35	83	小塚遺跡	弥生･古墳･古代･中世	集落	葛原字小塚
33	親王3号塚	中世	塚(墓)	北鴨22	84	中東遺跡	弥生･古墳･古代･中世	集落	奥白方字片山
34	梅ノ木塚	中世	塚(墓)	堀江310	85	多度津城跡	中世	城館	桃山
35	ねこ塚	中世	塚(墓)	堀江1-55-3	86	入道屋敷跡	中世	城館	北鴨･堀江
36	仏供田塚	中世	塚(墓)	北鴨	87	佐柳城山城跡	中世	城館	佐柳
37	東林坊遺跡	中世	塚(墓) 包蔵地	北鴨2-558	88	鍋屋敷跡	中世	城館	北鴨字牛渕
38	山神塚	中世	塚(墓)	堀江730	89	西浦屋敷跡	中世	城館	南鴨字北ノ口
39	八幡塚	中世	塚(墓)	道福寺727角田	90	西屋敷跡	中世	城館	南鴨字森時
40	経塚	中世	塚(墓)	南鴨375-4	91	浦屋敷跡	中世	城館	南鴨字森時
41	南鴨遺跡	弥生･古墳･古代･中世	包蔵地(集落)	南鴨大井･辻など	92	葛原大木東屋敷跡	中世	城館	葛原字大木
42	法泉(廃)寺跡	中世	寺院	南鴨大井66	93	泉屋敷跡	中世	城館	山階字色田
43	岡古墳	古墳時代	古墳	東白方字岡892	94	富田屋敷跡	中世	城館	葛原字小塚
44	一里塚旧址	中世	その他	葛原大東1185	95	北鴨Ⅰ･Ⅱ遺跡	弥生時代	集落	北鴨2丁目
45	実盛塚	中世	塚(墓)	葛原本村1333-2	96	奥白方南原遺跡	弥生･中世	集落	奥白方南原
46	堀塚	中世	塚(墓)	葛原八幡	97	奥白方中落遺跡	弥生･古墳･中世	集落	奥白方中落
47	中又遺跡	弥生	包蔵地(集落)	道福寺166	98	庄八尺遺跡	弥生･古墳･古代･中世･近世	集落	庄
48	笠地蔵塚	中世	塚(墓)	本通3丁目甲673-1	99	西白方瓦谷遺跡	旧石器･縄文･弥生･古墳･7世紀･奈良時代	集落	西白方瓦谷
49	綱盛塚	中世	塚(墓)	青木石橋679	100	中津兵庫遺跡	弥生･古墳	集落	南鴨字糺203･204･205
50	船塚	中世	塚(墓)	本通3丁目甲673-1	101	中又北遺跡	弥生	集落	道福寺字中又
51	水棹塚	中世	塚(墓)	青木石橋678	102	三井鴨取遺跡	古代～中世	集落	三井字鴨取402-1･2･4･5

第１表　周辺遺跡一覧

の開削時期に幅があることから、8 世紀段階に一様に条里地割が敷かれていたわけではなく、9 世紀にかけて徐々にその形を呈してきたと考えられる。集落の展開も奥白方中落遺跡において条里地割の方向に柱間が並行する掘立柱建物が確認されており、同様の遺構が三井鴨取遺跡においても確認されており、西白方瓦谷遺跡でも住居跡や建物跡などが確認されている。そのため、古代後半頃になると道隆寺が建立され、堀江津が開かれることになるが、古代における住居、あるいは集落域の中心はまだまだ町域の西側にあり、町域の中心から東側にかけては、基本的には生産域として展開し、一部小規模な集落が展開していくようである。条里の坪界溝が先行して町域の西側から敷かれていくこともこのことに符合している。条里が敷かれる 9～10 世紀段階に徐々に町域の東側に生活域の中心が移行していくようである。

中世以降

中世以降になると遺跡の集中が白方地区に優位性が見られなくなり、町域の中心部から東側でも、中世初期の段階から賀茂神社の荘園が展開し始め、細川氏の所領として、守護代の香川氏が入封の後に居城を多度津城に構え、港の中心も堀江津に移行していったことから、遺跡の展開も、本遺跡のある南鴨や、道隆寺を中心とした地域(堀江庄)には鍋屋敷跡や西屋敷などの中世の館跡や塚ではないかとされるものも多く見られるようになり、庄八尺遺跡や小塚遺跡のある葛原庄などの荘園を中心とした立地も増えてくる。おそらくはそれまでの弘田川流域を集落の中心としてきたことから、港の変更とともに金倉川流域にその中心が移行していったのだろう。ただし白方地区が完全に収束するわけではなく、中東遺跡や奥白方中落遺跡、奥白方南原遺跡などでも名主クラスのいた村落が想定されている。今回の調査区でも中世の瓦器が大量に出土し、僅かではあるが白磁や青磁なども出土している。これは近隣に物流の拠点であった堀江津の存在していたことにも繋がり、さらに荘園を管理していく上での何らかの施設が周辺に存在していたことを想定させる。ちなみに表 1 の 40 番「経塚」に関しては今回の調査において確認されず、耕作などで消失したものと考えられる。

近世には秀吉支配の安土桃山時代から多度津藩の展開により、人々の生活の中心は完全に堀江津を中心としたものに移行する。さらに京極氏による支配になると、現在の多度津港とほぼ同様の地に港が構築され、家中を中心とした集落配置となり、南鴨遺跡以南は耕作地として終始し、近代を迎える。

参考文献

「北内遺跡 池下遺跡 満濃バイパス予備調査 小塚遺跡」『国道バイパス建設に伴う埋蔵文化財発掘調査概報』香川県教育委員会　2000

「中東遺跡２ 奥白方中落遺跡 奥白方南原遺跡」『県道丸亀多度津線建設事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告』香川県教育委員会　2008

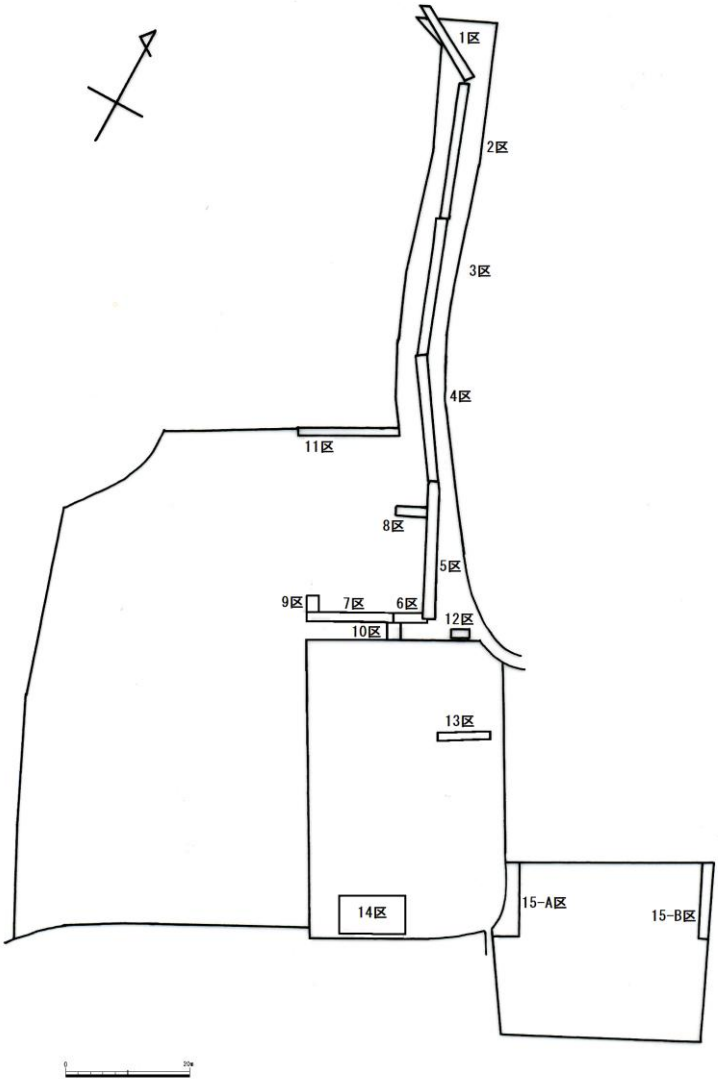
「第Ⅱ章 遺跡の立地と環境」「庄八尺遺跡」『県道多度津丸亀線道路改築事業(多度津工区)に伴う埋蔵文化財発掘調査報告』香川県教育委員会　2009

「西白方瓦谷遺跡」『県道津丸亀詫間豊浜線(多度津西工区)緊急地方道路整備工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告』香川県教育委員会　2012

第３章　調査の成果

第１節　調査区の概要と層序

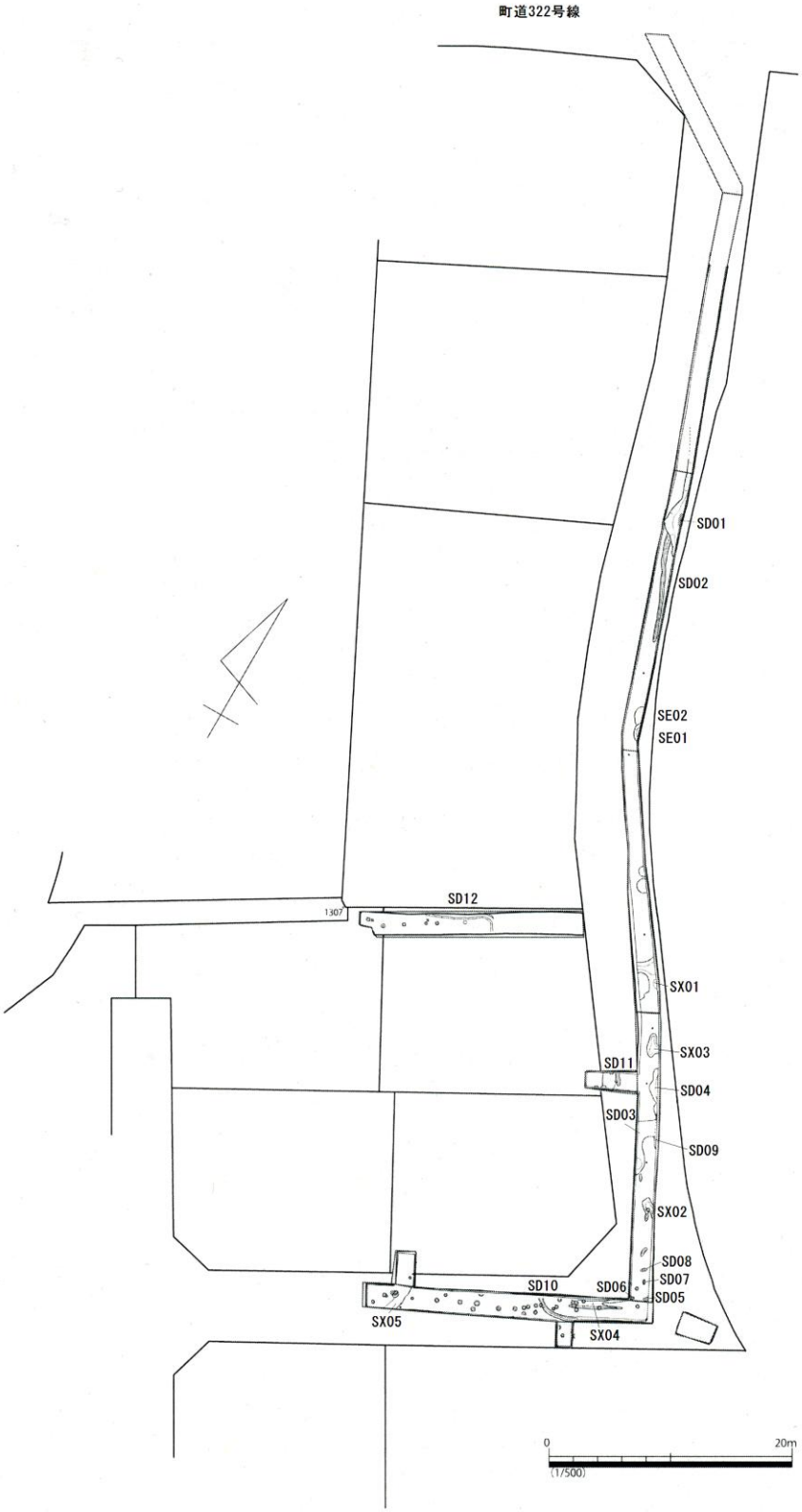
調査区(第 3 図)は、現状で田畑になっており、調査次数と区画別に設定した。平成 24 年度 7 月 19 日から 7 月 30 日までの調査は 1～12 区を設定し、同年 12 月 14 日に 13 区と 15 区、平成 25 年 1 月 10 日から 1 月 17 日までを 14 区を設定して調査を実施した。



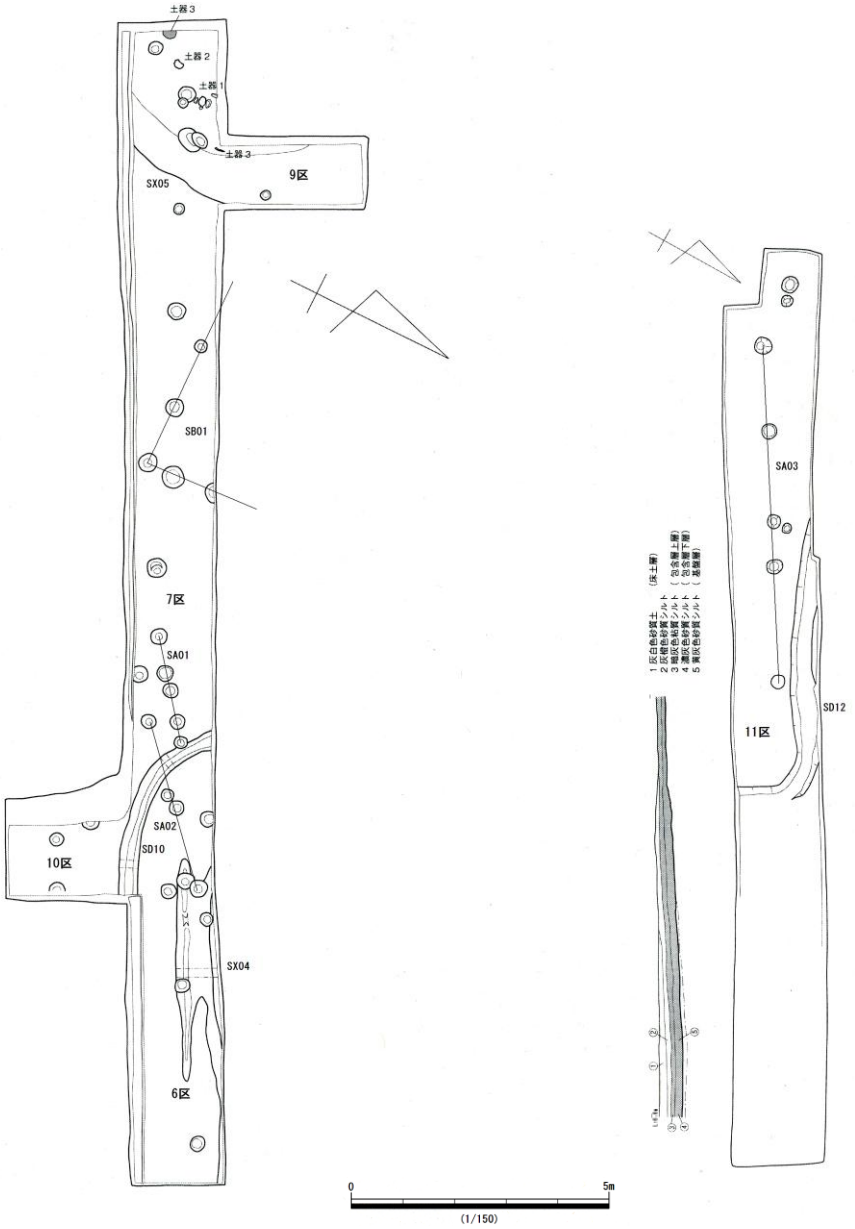
第3図　調査区割図(1/1,200)

調査区の壁面断面図は作成した図面のうち、11・13 区のものを部分的に掲載する。以下、調査区ごとに報告する。また層序(そうじょ)は立会調査時の簡易の断面図のみであるため、部分的に掲載する。

1 区から 5 区までは全調査区の北端部から南に連続して設置した。6 区から 7 区は 5 区の最南部と接続し、そこから東西に連続する調査区である。8 区は 5 区の北部分から西に伸ばした調査区。9 区は 7 区の西部分



第 4 図 1～12 区遺構配置図(1/600)



第5図　6･7･9･10･11区 遺構配置図　11区南壁断面図(1/150)

から北に伸ばした調査区。10 区は 6 区と 7 区の接続部分から南に伸ばした調査区。11 区は 4 区の西側に東西に広がる調査区である。1～11 区の調査区の層位は耕作土と床土直下に遺物を包含しない灰橙色の砂質の強いシルト層があり、その下位に粘質の強いシルト層と礫混じりで砂質の強いシルト層の 2 層の遺物包含層の下に遺構面を確認した。

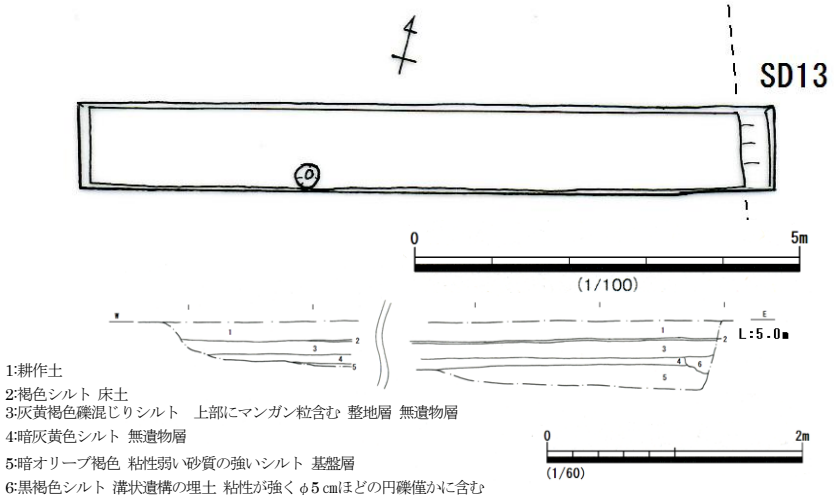
12 区は調査区の中央部に位置し、遺構は検出されなかった。

13 区は調査区の南東部に位置し、耕作土と床土直下に無遺物層がありその直下が遺構面である。

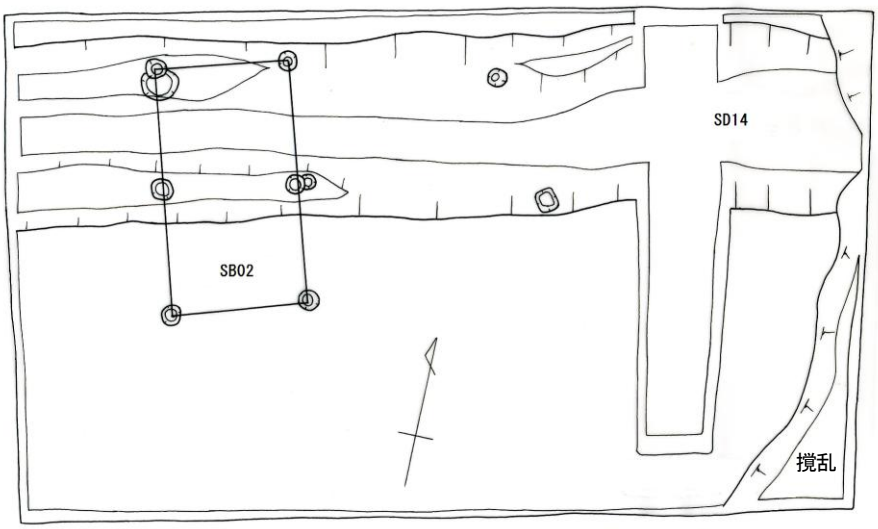
14 区は調査区の南側中央部に位置し、耕作土と床土直下に砂質の強い基盤層が見られ、その上面が遺構面である。調査区の東端部には、遺構面を切り込むように礫を多量に含んだ撹乱が見られる。東側にある

15 区が旧河道であったことを考えると、これは河川の氾濫によるものであると考えられる。撹乱内には比較的古い遺物を含んでいる。ベース面の標高は約6m前後である。調査区の南に向けて徐々に遺構面の標高は高くなる。

15 区は調査区の南東端部に位置し、耕作土と床土を除去すると、2 層の無遺物層があり、その下層に包含層が見られたが遺構の存在は確認できなかった。基盤層の上面には 10～20cm 前後の礫を多く含んでおり、そこには遺物が確認されている。この礫の存在からこの調査区内は、全面に渡って金倉川の旧河道上に位置すると考えられる。



第 6 図 13 区　平面図(1/100) 断面図(1/60)



第7図　14区　遺構配置図 (1/100)

第２節　遺構と遺物

第１項　中世以前

【掘立柱建物】

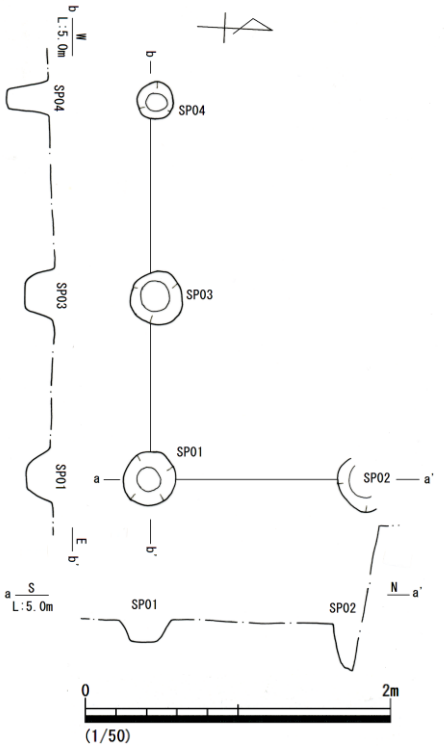
《SB01　(第 6・8 図)》

７区の中央部で検出した。柱穴 4 基を確認した。埋土は暗褐色系のシルトで、柱間は確認できる範囲では梁間 1 間(1.4m)、桁間 2 間(2.5m)の掘立柱建物である。建物の主軸は東西方向になっている。柱穴平面

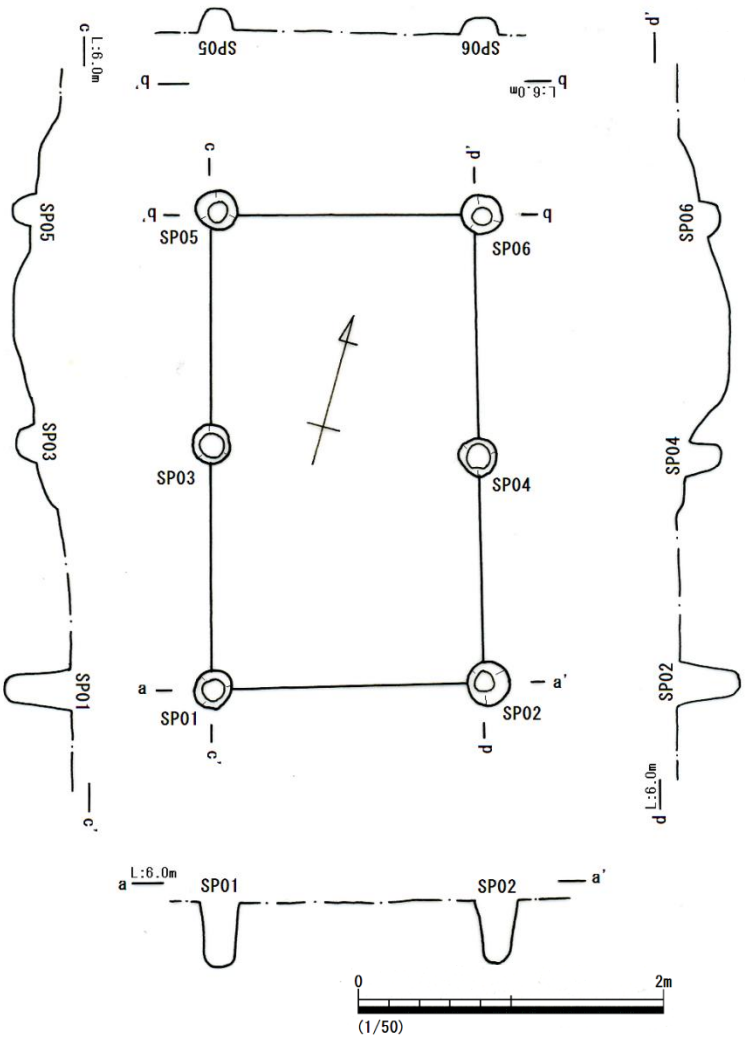
形は円形が基調で、柱穴規模は直径 0.28～0.36mである。若干小型の建物となる。明瞭な遺物は確認できないが、僅かな遺物や埋土の色や建物の方位などから、古墳時代後期頃の建物ではないかと考えられる。

《SB02　(第 9 図)》

14 区の北西部で検出した。柱穴 6 基を確認した。埋土は同様の灰黄褐色のシルトが入っていた。柱間は確認できる範囲では梁間 1 間(1.8m)、桁間 2 間(3.2m)、面積 5.76 ㎡の掘立柱建物である。建物の主軸は北から約 30°西傾する。柱穴平面形は円形が基調で、柱穴規模は直径 0.22～0.30m、深さは SP03~06 が上部を SD14 に削られているため、残りの SP01 と 02 から考えると、0.40m前後である。ただし残りの 4 基も合わせて、柱穴の底場の標高は 5.5m前後でそろっている。柱痕等の痕跡は見られず、柱穴の中で SP03 と SP06 からは、わずかに土器片が見られるのみであった。しかし建物の主軸方位が条里地割に合致し、中世を中心とした溝状遺構との切り合いにより、後述する SD14 よりも先行することから、古代の終わりころから中世の前半頃の掘立柱建物ではないかと考えられる。



第8図　SB01　平面図･断面図(1/50)



第 9 図　SB02 平面図･断面図(1/50)

【柱列】

7 区と 11 区で検出した。7 区に SA01 と SA02 を、11 区は SA03 で、列の方位は総じて西に約 30°傾いており、条里地割に合致した方位を呈している(第 5 図)。一間の長さが不定な SA03 は柵列である可能性が高いが、他の 2 基は調査区の設定上

柱列としているが、おそらくは南北にどちらかに展開する掘立柱建物の一部であると考えられる。出土した遺物も土師器片と瓦器片で中世を中心とした構成となっている。

以上のことから多くの柱穴は中世段階のものであると考えられる。

【溝状遺構】

《SD01　(第 4・14 図)》

2 区の南端部から 3 区の北半分に南北に走る溝状遺構である。残存幅 1.5m、深さは残存で最大 14㎝ を測る。しかし溝の両端を確認できていないため、溝の用途についてははんだんできないが、底部から 10 ㎝の厚さの最下層の砂礫層に土器の集中する地点があり、廃棄された土器が集積しているものと考えられる。出土した遺物は、土師器と瓦器と須恵器の小片である。1 は土師器の小皿で、2～6 は瓦器で、2・3 は小皿、4～6 は碗で内面は丁寧にミガキがかけられている。瓦器は和泉型である。出土遺物から一部は古代末も含まれるため掘削時期は古代末頃であるが、中世段階に埋没した遺構であると考えられる。

《SD02　(第 4 図)》

3 区の中央部から北半部に南北に走る溝状遺構である。残存幅 0.5m、深さは残存で最大 10㎝ を測る。出土した遺物は土師器や瓦器の小片で、出土遺物は中世を中心にしたものではあるが、SD01 より先行する遺構であり、真北方向から約 30°西傾していることから、古代末頃に開削された条里地割に沿った坪界溝であると考えられる。

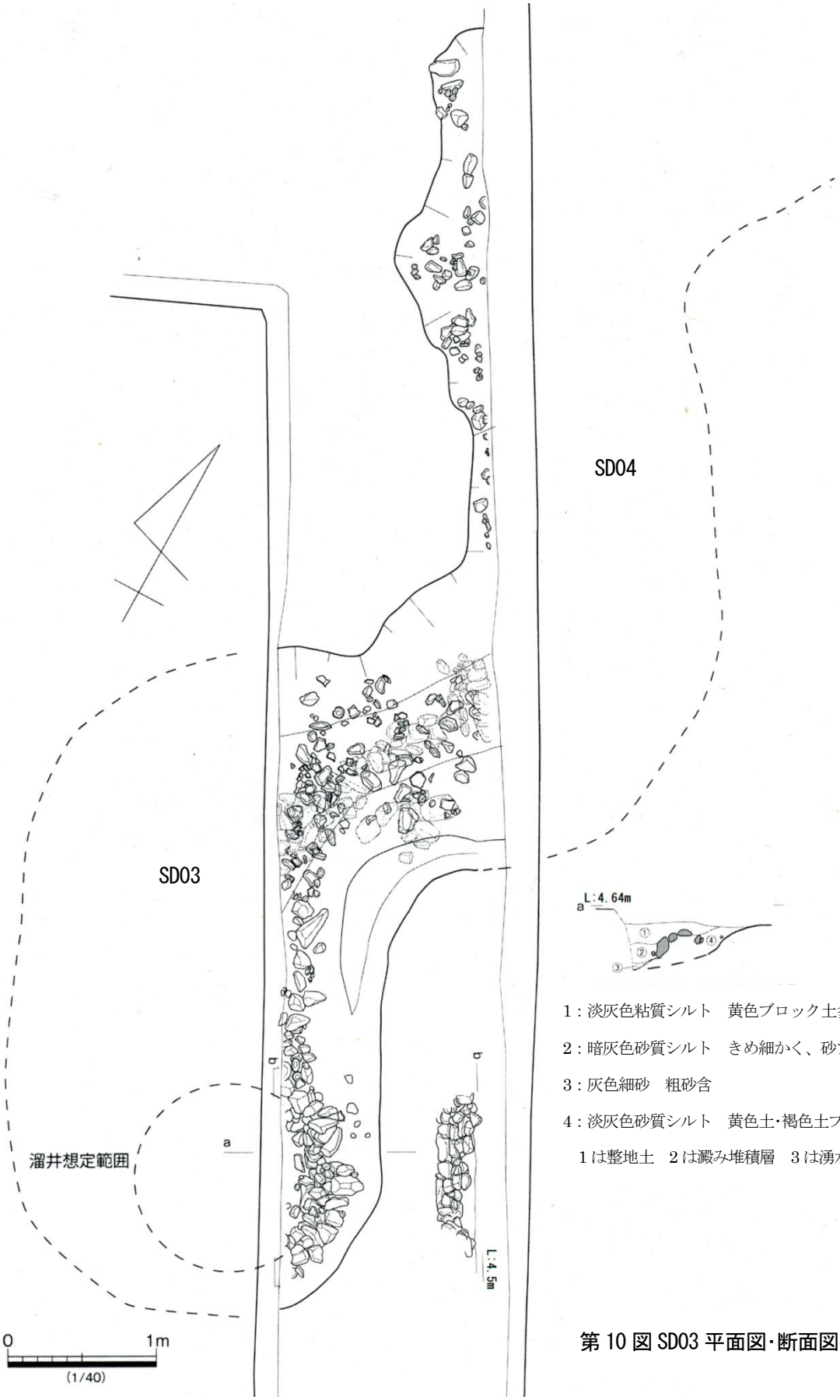
《SD03　(第 10・15・16 図)》

5 区の北半部に東西に走る溝状遺構である。幅 1.95m、深さは残存で最大 26㎝ を測る。上層に黄色のブロック土を多く含んだ淡灰色の粘性のシルト層が最大で 14㎝ 程度残存した整地土、その下層に 14㎝ 程度のきめ細かく砂質のブロック土を含んだ暗灰色砂質シルト層がみられる。さらに最下層には粗砂を含んだ灰色細砂層がある。これら 3 層に覆われるように 20 ㎝前後の礫を敷き、その裏込めとして黄色と褐色のブロック土を含んだ淡灰色砂質シルト層がある。出土遺物は下層と最下層から土師器・須恵器・瓦器・鉄滓(てっさい)などを出土した。7～28 は土師器で、7～23 は小皿で、24・25 は坏(つき)、26～28 は椀である。29～50 は瓦器で、29～34 は小皿で、35～50 は碗である。出土遺物の中で土師器の小皿と坏に関しては古代、その中でも 10 世紀段階まで遡るものもある。土師器の椀に関しては中世段階のもので、その中でも 28 は吉備系の土師器椀である。瓦器は全て和泉型のもので、内面には丁寧なミガキ調整を行っている。

この遺構は礫敷きの構造から溜井(ためい)と想定される部分が含まれる。さらに溜井を含み、湾曲した構造から、周辺の条里地割に沿った直線状の坪界溝とは様相が異なる。そのため SD03 は周辺の建物に付随する何らかの施設であった可能性も考えられる。

《SD04　(第 10 図)》

SD04 は SD03 連続する遺構である。残存幅 0.58m、深さは残存で最大 6㎝ を測る。10～40 ㎝の礫を多く含み、遺物を内包する層は下層の砂礫層である。出土した遺物は土師器や瓦器の小片で、遺構の時期は SD03 同様の時期であると考えられる。



1：淡灰色粘質シルト　黄色ブロック土多混

2：暗灰色砂質シルト　きめ細かく、砂ブロック含

3：灰色細砂　粗砂含

4：淡灰色砂質シルト　黄色土･褐色土ブロック混

1は整地土　2は澱み堆積層　3は湧水堆積層　4は石積裏込土

第 10 図 SD03 平面図･断面図 SD04 平面図(1/40)

《SD05　(第 4 図)》

5 区の南端部にある溝状遺構である。幅 35 ㎝、深さは残存で 4㎝ を測る。端部のみの検出で上端の大部分が削られているため、遺構の性格についての判断は難しい。出土遺物は土師器と黒色土器らしき小片のみで、古代から中世を中心にしたものであると考えられる。

《SD06　(第 4・17 図)》

5 区の南端部にある溝状遺構である。幅 20 ㎝、深さは残存で 4㎝ を測る。端部のみの検出で上端の大部分が削られているため、遺構の性格についての判断は難しいが、検出位置から SD05 の続きである可能性があるに留める。出土した遺物は 51・52 が土師器で、51 は小皿で、52 は坏である。53 は瓦器の小皿である。古代から中世前半を中心とした遺構であると考えられる。

《SD07　(第 4 図)》

5 区の南端部にある南北に走る溝状遺構である。幅 20 ㎝、深さは残存で 3㎝ を測る。上端が削られていて SD03 遺構の性格についての判断は難しい。出土遺物は土師器片のみで中世を中心にしたものであり、耕作痕の可能性が考えられる。

《SD08　(第 4 図)》

5 区の南端部にある東西に走る溝状遺構である。幅 20 ㎝、深さは残存で 3㎝ を測る。上端が削られていて遺構の性格についての判断は難しい。出土遺物は土師器片のみで中世を中心にしたものであり、耕作痕の可能性が考えられる。

《SD09　(第 4 図)》

5 区の北半部にある南北に走る溝状遺構である。残存幅 20 ㎝、深さは調査区端部にあるため確認はできない。出土遺物も土師器の小片のみで正確な時期は推定できないが、SD03 と SD04 を切り込んでいるため、中世以降の遺構であると考えられる。

《SD10　(第 5・18 図)》

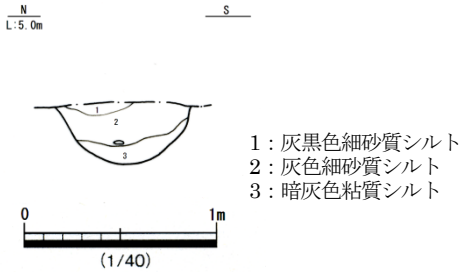
7 区の東端部にかけて走る溝状遺構である。幅 38 ㎝、深さは残存で 9㎝ を測る。7 区東端北側から 6 区の西端部と 10 区の北端部に向けて湾曲した形状をしている。出土した遺物は、54 が高台部をしっかりと造り出した土師器の椀である。出土遺物は中世を中心にしたものではあり、中世段階の坪界溝であると考えられる。

《SD11　(第 4 図)》

8 区の中央部を南北に走る溝状遺構である。幅 30 ㎝、深さは残存で 4㎝ を測る。出土した遺物は輸入磁器の白磁が 1 点出土している。その他は土師器や瓦器の小片で、上端が削られていて遺構の性格についての判断は難しいが。出土遺物は中世を中心にしたものであり、遺構の主軸方向から中世段階の条里地割に沿った坪界溝の可能性が考えられる。

《SD12　(第 5・11・19 図)》

11 区の中央部に東西に走る溝状遺構である。幅 0.72m、深さは残存で最大 32㎝ を測る。上層に灰黒色シルト層が僅かに残存し、その下位に 20㎝ 程度の黄灰色のブロック土を含んだ砂質の強いシルト層がみられる。さらに最下層には微細な黄灰色のブロック土を含んだ粘性の強い暗灰色のシルト層がある。これら 3 層とも遺物を含む。出土遺物は土師器、須恵器、黒色土器、瓦器など、古代から中世にかけての遺物が混在して出土している。出土状況は上層・下層・最下層ともに、時期的な差異は見られるようなものではなかった。55 は土師器の小皿で 56 は瓦器の小皿である。



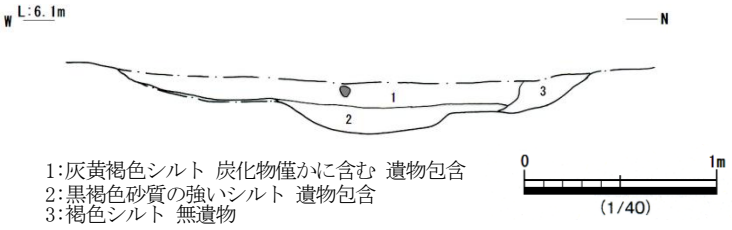
第 11 図　SD12　断面図(1/40)

《SD13　(第 6 図)》

13 区の東端で検出した溝状遺構である。調査範囲が狭く、遺構の上端の片側しか確認できていないため、溝の規模などは推定するしかないが、後述する SD14 に直交し、13 区や 14 区のなどを含めた範囲を区画する坪界溝である可能性は高い。出土遺物は土師器、須恵器、瓦器、白磁などの小片で　炭化物も含まれていた。古代から中世にかけての遺構であると考えられる。

《SD14　(第 7・12・20 図)》

14 区の東西に渡って検出した溝状遺構である。幅 2.2m、深さは残存で最大 32cm を測る。上層に炭化物を僅かに含んだシルト層が覆い、その下位に 5cm 程度の円礫を多く含んだ砂質の強いシルト層がみられる。さらに部分的には最下層の粘性の強いシルト層が見られる場所もある。これら 3 層とも遺物を含む。出土遺物に関しては上層・下層・最下層ともに、時期的な差異はほとんど見られなかったが、最下層だけが僅かに黒色土器の小片を確認した。出土遺物は、57～62 は土師器で 57・58 は小皿、59 は坏、60・61 は椀、特に 60 は吉備系土師器椀で、中世段階に海を越えて岡山県の笠岡や児島付近と密接に関係があったことが伺える。62 は飯蛸壷である。63～66 は須恵器で、63・64 は広口壷の底部である。65 は甕(かめ)で、東播系(とうばんけい)の甕の頸部である。66 は十瓶山(とがめやま)系の捏(こ)ね鉢である。67～70 は瓦器碗である。一部古墳時代後期から終末期にかけての TK209~TK217 並行期の須恵器も見られるが、一部僅かに東播系の甕が混ざり、須恵器に関しての時代幅は 600 年前後もある。それらの多くは、SD14 の開削段階に包含層などから混入したものであると考える。また出土した瓦器の破片の多くが碗であり、全てが和泉式瓦器碗の形態を示している。さらに S－1 は滑石製の紡錘車である。これは最上層からの出土で、表面に若干ではあるが沈線を施した痕跡が見られる。おそらくは古墳時代中期頃のものが氾濫などで流入したものではないかと考えられる。



第 12 図　SD14　断面図(1/40)

遺物の出土時期から若干の古墳時代中期から後期にかけての遺物も混ざるものの、大量の瓦器の出土から 13 世紀がその中心となり、一部 15 世紀までを上限とした遺構であるといえる。ただし最下層の部分に

比較的多くの黒色土器が混ざっていることから、その部分だけは古代の終わりころから中世の初期にかけての SD14 前段階の溝状遺構の残存部分ではないかと考えられる。また溝状遺構としての主軸方向は条里地割に沿っているため、古代末から中世段階の坪界溝であった可能性が高い。

【性格不明遺構】

《SX01　(第 4・21 図)》

4 区の南端部で検出した不定形の落ち込みである。一部溝状のものを含むこの遺構は、残存する深さは 16 ㎝程度あり、埋土中に大量の土師器、須恵器、瓦器などの遺物を内包していた。破片が多く、図化できるものが少なかったが、71 は土師器の高坏、72 は瓦器の小皿である。その他の出土遺物として獣骨なども含む。出土した遺物は古代から中世段階のものである。古代から中世段階の溝状遺構の中から、死後の遺棄や、祭祀で投げ込まれた馬や牛の骨が見られることがあることから、遺構の性格としては坪界溝の可能性が考えられる。

《SX02　(第 4 図)》

5 区の中央部で検出した不定形の落ち込みである。幅は 0.95m、深さは残存で最大 5cm を測る。
出土した遺物は土師器や瓦器の小片で、獣骨なども含む。出土した遺物は古代から中世段階のものである。

《SX03　(第 4 図)》

5 区の北端部で検出した不定形な遺構である。長さ 40 ㎝、幅 16 ㎝、深さは残存で最大 20cm を測る。一見すると土坑のようであるが、上端が削られ、特徴的な遺物が出土しているわけでもないため、遺構の性格は不明である。

《SX04　(第 5 図)》

7 区の西半分で検出した不定形の遺構である。長さ 2.2m、残存幅 0.42m、深さは残存で最大 8cm を測る。東西に延びる構造が、条里地割に沿っているようにも見えるため、上端を削られ、底部だけが残った 2 条の溝状遺構の可能性がある。出土遺物は土師器、須恵器、黒色土器、瓦器、白磁などの小片、そして鉄滓も含まれていた。遺構の時期は古代から中世段階であると考えられる。

《SX05　(第 5・22 図)》

7 区の西半分で検出した不定形の落ち込みである。深さは残存で最大 15.4cm を測る。比較的残存状況のよい土師器を出土しており、73・74 は広口壷、75・76 は甕である。73 は第 5 図で土器 1 と表示されているもので、焼成はかなり不良であるが、内外面にタテハケを施し、底部内面に指オサエが残っている。おそらくは古墳時代前期段階の遺物であろう。74 の広口壷の口縁部は第 5 図で土器 3 と表示されているもので、内面の調整は摩耗のため残っていないが、立ち上がりの形状等、その特徴から下川津Ⅳ式段階の古墳時代初頭の遺物であると考えられる。78 は第 5 図で土器 2 と表示されているもので内面調整は摩耗により確認できないが、外面調整には頸部から一次調整にヨコハケを行い、胴部下より同じ単位のハケでナナメハケ、さらに胴部下半から底部に向けて、細かい別のハケを用いたナナメハケで調整しており、丹念な調整が窺える。その特徴から古墳時代前期末から中期にかけてのものであると考えられる。出土遺物からこ

の遺構は古墳時代前期から中期にかけてのものであると考えられる。

SX06 （第 4 図）

8 区の西半分で検出した落ち込みである。深さは残存で最大 4cm を測る。出土遺物は土師器の小片で、その特徴から古墳時代後期から古代初頭頃の遺構であると考えられる。

第 2 項　近世以降の遺構

【土坑】

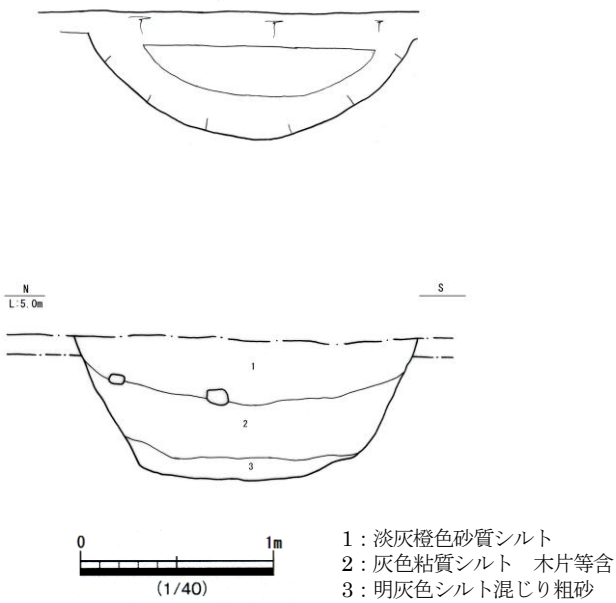
《SK01》

11 区で検出し、遺物も出土したが、遺構の性格が電柱埋設時の撹乱であり、周辺の包含層や遺構等にあった遺物が混入したものと考えられる。図上の表示は省く。

【井戸跡】

《SE01 （第 13 図）》

3 区の南端部で検出した。近世以降の素掘りの井戸である。残存径は 1.84m、深さは残存で最大 0.82m を測る。埋土中には中世段階の瓦器片なども見られるが、埋没段階に周辺の包含層のものが流入したものであろう。古代から中世にかけての包含層に切り込むように遺構が形成されているため、時期的にはそれよりも新しい近世段階の遺構だと考えられる。



第13図　SE01　平面図・断面図(1/40)

第 3 項　包含層・撹乱出土の遺物

第 23 図に示した遺物は、14 区の東側にある金倉川の洪水砂による撹乱と調査区の包含層から出土した遺物である。

まず撹乱(第 7 図)に関しては中世段階の SD14 に切り込んであるため、河川の氾濫時期は中世の後半くらいになると考えられる。包含層は調査区の床土直下の層や 2～3 枚の無遺物層を挟んで確認されている。基本的には砂質の強い暗褐色系のシルト層である。

77・78 は弥生土器の広口壷である。78 は頚部の貼付突帯には刻み目が入っており、頸部に縄をかけた意匠となっている。外面調整はタテハケが、内面調整にはナナメハケをナデ消している。頚部の立ち上がりが急で、器壁も厚い。多度津町内に同様の類例が見られないが、調整の内容や立ち上がりの形状から、おそらくは弥生時代中期後半頃のものである。79･80 は土師器で、79 は焙烙（ほうろく）、80 は飯蛸壷である。いずれも中世段階のものである。81 は十瓶山系の捏ね鉢である。82・83 は平瓦である。ほとんど摩耗して残っていないが 2 点とも布目タタキの痕跡が残っており、胎土は黄褐色系の粗いつくりである。古代の瓦であると考えられる。近隣には宗吉瓦窯があり、南鴨地区にはこの他にも古代の布目瓦を表採されていることから、古代の段階に何らかの瓦葺の建物が存在していたのではないかと推定できる。

第４章　総括

以上の結果をもとに、南鴨遺跡で判明したことをまとめたい。

弥生時代

攪乱と包含層に弥生土器が 2 点のみ出土しており、現状では周辺の遺跡で弥生時代の遺構を明確に検出している遺跡はないため、上流部に弥生時代中期～後期にかけての遺構の存在が窺えるのみである。

古墳時代

SB01 と SX05 の確認ができ、建物の存在と古墳時代後期段階の集落の存在が窺える。また SD14 には古墳時代中期ころの須恵器や滑石製紡錘車が出土していることから、最下層の部分は古墳時代の段階の灌漑遺構が残存している可能性もある。ただしほとんどの古墳時代の遺物は新しい時代の遺物と混ざり合って出土していることから、近接する金倉川や上流の葛原地区から続く、谷状の低位部からの流れ込む位置にあるため、遺物の多くが、南鴨遺跡に直接的に関係する遺物ではないことも十分に考えられる。

古代

出土遺物の TK217 の須恵器の存在から、溝状遺構 SD01・SD03・SD04・SD05・SD09・SD12・SD13・SD14 の開削時期は古代、特に古くは 7～8 世紀段階に遡ることができる。しかし土師器などの多くは古くとも 10 世紀以降のものであるため、その段階から南鴨地区周辺では特に切り合いの関係で SD14 の前段階に位置する SB02 などの存在から、小規模ではあるが 10 世紀初頭の段階から集落を形成していたと考えられる。そして従来から言われていた通り、9 世紀代から条里地割が敷かれ始める白方地区に後発して、南鴨遺跡周辺は条理地割を敷くようになったのでは、と想定することができる。

中世

今回検出した 14 区の SD14 からの出土遺物、特に大量に出土した和泉式の瓦器から今回の調査に限っては中世の 13 世紀頃が遺構の密度が高い遺跡であるといえる。しかも 3 章で示したように今回検出された溝状遺構の多くは条理地割に沿った様相を示している。全体を通しても古墳時代中期から平安時代にかけての中世以前の遺物が確認され、溝状遺構の下位には一部掘り直しのような痕跡も見られるため、中世段階にいくつかの溝状遺構を改修したものであると考えられる。周辺の奥白方南原遺跡でも中世段階に改修した溝状遺構が確認されているため、今回確認された溝状遺構も先行する古代の溝状遺構が改修されたものであるといえるだろう。

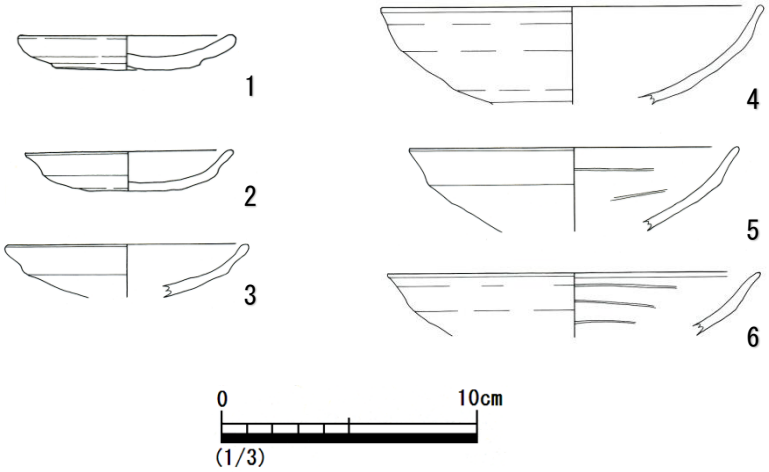
また今回の調査では和泉式の瓦器や吉備系土師器椀が大量に出土している。形状としては大半が粗製のものであるが、吉備系土師器椀から推定されるように中世の終わりころには明確な本州との交易を窺うことができる。これらの出土数の推移は中世における拠点的な集落(港湾部や街道の起点、中世城郭周辺の集落)が形成される場所においてみられるもので、いまだ明確には発見できていないものの、中世多度郡においては多度津(兵庫北関入船納帳では多々津と表記)という港の発展や京都下鴨(賀茂)神社の御供田として荘園が展開していたことなども加味して、ある一定以上の集落構成がなされていたことを推定することが出

来るのではないだろうか。

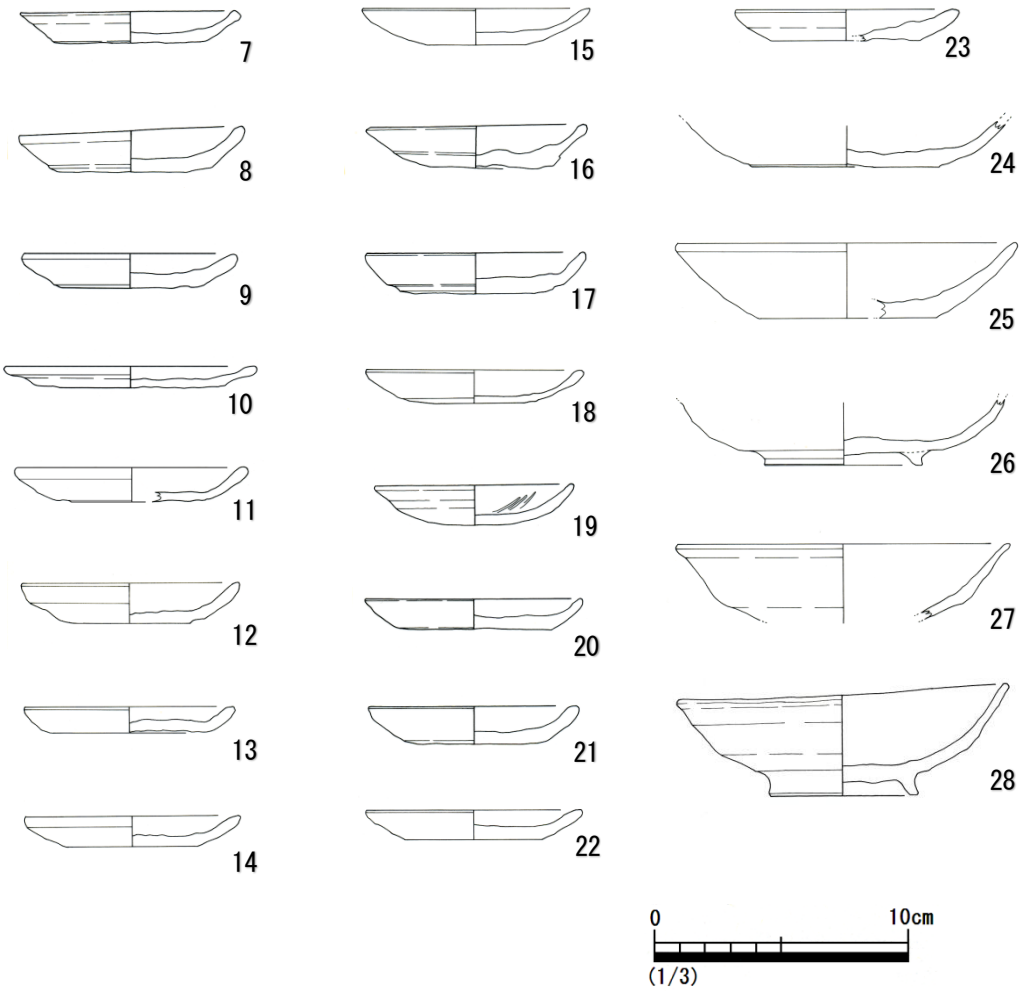
近世

遺構としては井戸跡のみ確認されており、調査区全般にわたって、水田になっていたと考えられ、そのまま土地利用に関しても現在に至る。集落の位置に関してもこの段階で、現在の南鴨地区の集落に重なっているのではないかと考えられる。

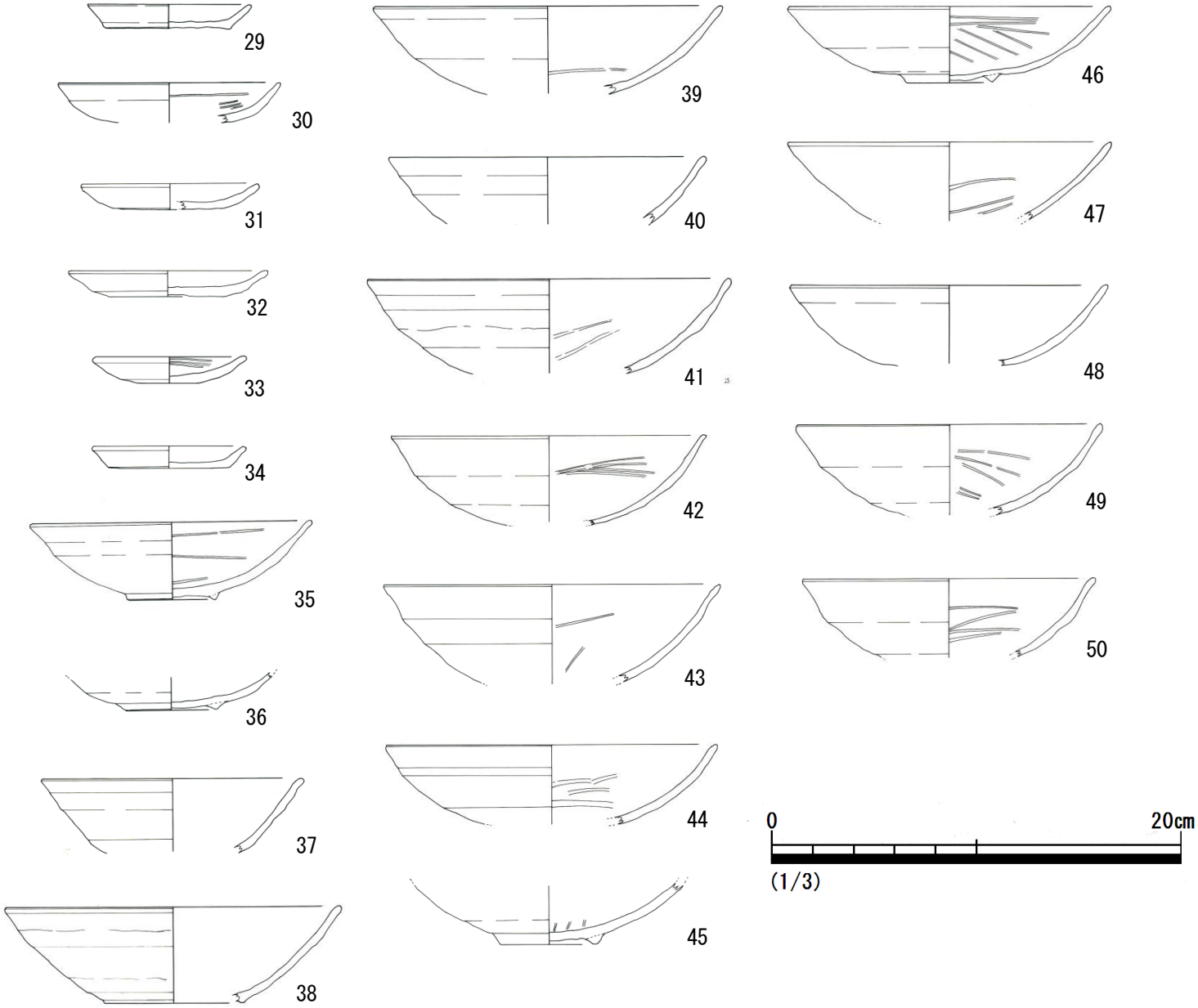
以上のように南鴨遺跡は、今回の調査においては、広範囲での遺構の粗密については判断できない。しかしその中でも調査区南部に遺構がある程度まとまっている状況は確認できた。そのため古代以降の広大な生産域の中に小規模な生活域が点在していたと考えられる。さらに出土した遺物には比較的多くの畿内や対岸の吉備からの搬入品が見られ、漁撈具も出土していることから、交易と生業の両面から海に関わっていた集落が存在したと考えられ、遅くとも古代には津として開けた多度津の様相を表している遺跡であるといえる。



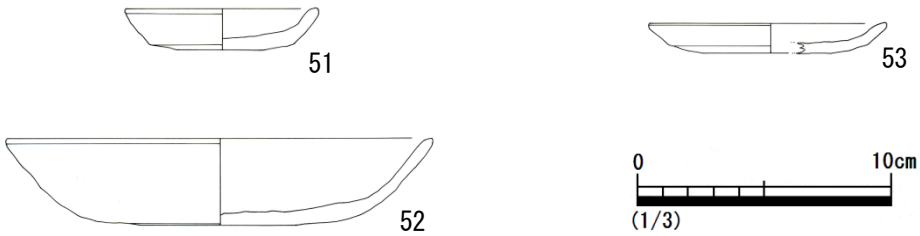
第 14 図　SD01　出土遺物（1/3）



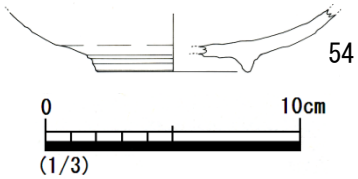
第 15 図　SD03　出土遺物 1（1/3）



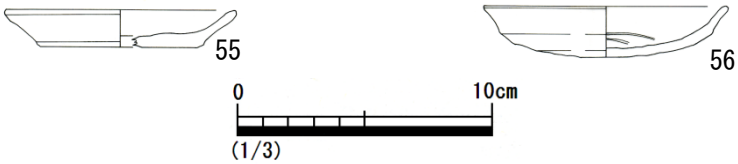
第 16 図　SD03　出土遺物 2（1/3）



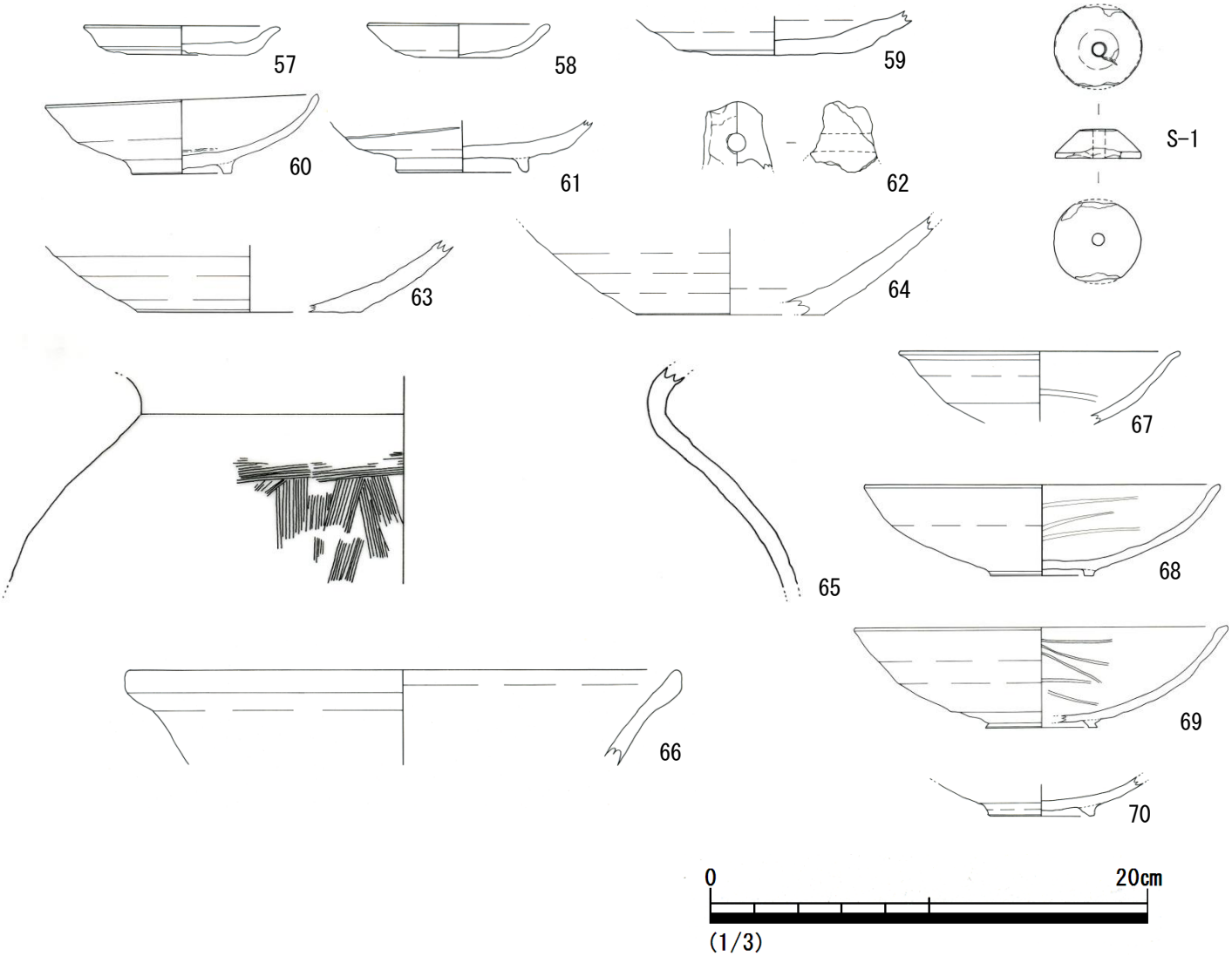
第 17 図　SD06　出土遺物（1/3）



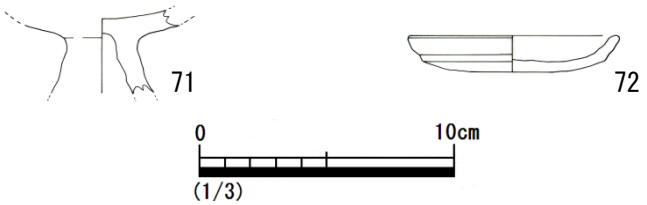
第 18 図　SD10　出土遺物（1/3）



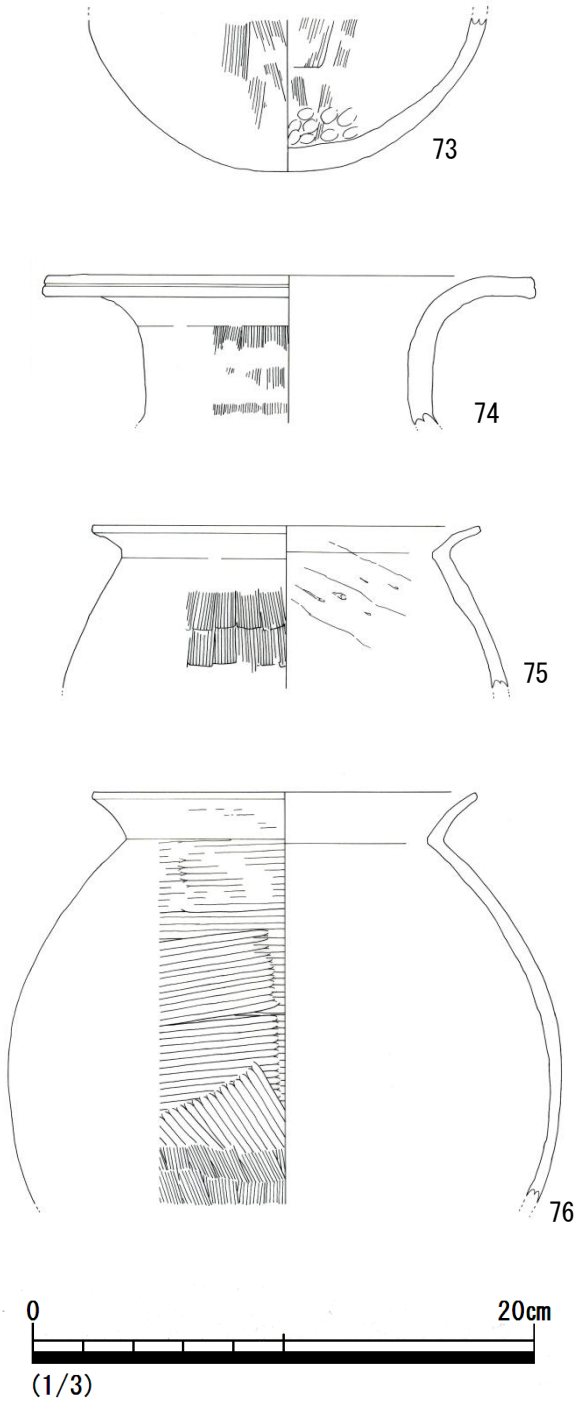
第 19 図　SD12　出土遺物（1/3）



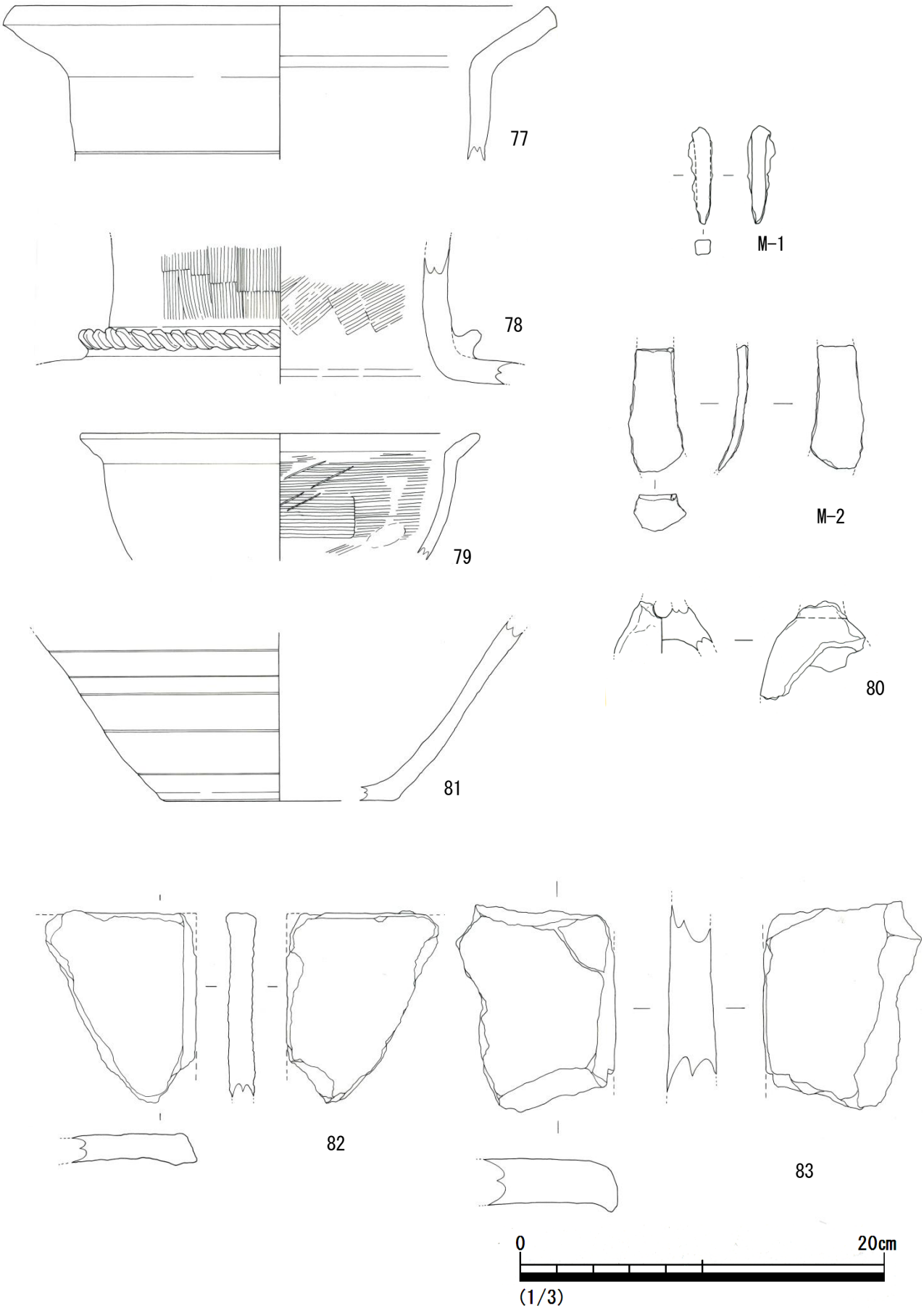
第 20 図　SD14　出土遺物（1/3）



第 21 図　SX01　出土遺物（1/3）



第 22 図　SX05　出土遺物（1/3）



第 23 図　撹乱･包含層等出土遺物（1/3）

第２表　土器観察表

報文番号	調査区	遺構名	層位	器種	口径(cm)	底径(cm)	器高(cm)	厚さ(cm)	長さ(cm)	幅(cm)	胎土	色調	焼成	外面調整	内面調整	残存率	備考
1	2区	SD01	暗灰色砂礫シルト層	土師器　小皿	8.40	5.70	1.30				細:石英少　細:長石少 細:赤色土粒僅	内・外:10YR8/2 灰白色 断面:5YR8/4 淡橙色	良好	口縁:ヨコナデ　底部:糸切り痕・ヨコナデ	口縁:ヨコナデ　底部:ナデ	3/5残存	回転台で製作した土師器
2	2区	SD01	暗灰色砂礫シルト層	瓦器　小皿	8.10	4.25	1.60				細:石英僅　細:長石僅	内・外・断:7.5YR6/1 灰色	やや不良	口縁:ヨコナデ　底部:押圧・ナデ	ヨコナデの後にミガキ	ほぼ完存 口縁1/10欠	
3	2区	SD01		瓦器　小皿	9.60						中:長石僅	内・外:N3/暗灰色　断面:N7/灰白色	良好	ナデ	ナデ　ミガキ	口縁1/8	
4	2区	SD01		瓦器　碗	15.00						中:石英僅　細:長石僅 中:黒色砂粒僅	内:5Y5/1灰色　外:N3/暗灰色　断面7.5Y8/1灰白色	やや不良	ナデ	ナデ　ミガキ	口縁1/5	
5	2区	SD01		瓦器　碗	13.00							内・外:5Y6/1灰色　断面:5Y7/1灰白色	やや不良	ナデ	ナデ　ミガキ	口縁1/8	
6	2区	SD01		瓦器　碗	15.50						細:長石僅	内:2.5Y黄灰色　外:2.5Y6/1黄灰色　断面2.5Y7/1灰白色	不良	ナデ	ナデ　ミガキ	口縁1/8	
7	5区	SD03	下層	土師器　小皿	8.60	6.00	1.25				中:長石僅	内・外・断:10YR8/2 灰白色	良好	口縁:ヨコナデ　底部:回転ヘラ切	ナデ	1/2残存	
8	5区	SD03	下層	土師器　小皿	8.95	6.20	1.80				細:褐色土粒少　中:石英僅	内・外:10YR8/2 灰白色　断:7.5YR8/4浅黄橙色	良好	口縁:ヨコナデ　底部:回転ヘラ切	ナデ	ほぼ完存 口縁一部欠	
9	5区	SD03	下層	土師器　小皿	8.20	5.00	1.30				細:長石僅　細:黒色砂粒僅	内・外・断面10YR8/2灰白色	良好	ナデ　底部:回転ヘラ切り	ナデ	2/5	
10	5区	SD03	下層	土師器　小皿	10.00	7.40	0.85				細:長石僅　細:褐色砂粒多	内・外・断面10YR8/2灰白色	良好	ナデ　底部:回転ヘラ切り	ナデ	1/4	
11	5区	SD03	下層	土師器　小皿	9.40	6.00	1.40				細:石英僅　細:褐色土粒僅	内・外・断面10YR8/2灰白色	やや不良	ナデ　底部:回転ヘラ切り	ナデ	1/3	
12	5区	SD03	下層	土師器　小皿	8.70	5.80	1.70				中:長石僅	内:10YR7/2にぶい黄褐色 外:2.5Y7/2灰黄色　断面:10YR7/2にぶい黄褐色	良好	ナデ　底部:回転ヘラ切り	ナデ	ほぼ完存	
13	5区	SD03	下層	土師器　小皿	8.30	6.00	1.05				中:赤色土粒僅	内・外・断面7.5YR7/3にぶい橙色	やや不良	ナデ　底部:回転ヘラ切り	ナデ	1/3	
14	5区	SD03	下層	土師器　小皿	8.40	5.40	1.20					内:7.5Y8/2灰白色　外:10YR8/2灰白色　断面:7.5YR7/4にぶい橙色	やや不良	ナデ　底部:回転ヘラ切り	ナデ	1/3	
15	5区	SD03	下層	土師器　小皿	8.90	3.80	1.45				中:赤色土粒僅	内・外・断面:10YR7/2にぶい黄褐色	良好	ナデ　底部:回転ヘラ切り	ナデ	3/5	
16	5区	SD03	最下層	土師器　小皿	8.60	5.80	1.80				中:褐色土粒少	内:10YR8/3浅黄橙色　外:2.5Y8/2灰白色	良好	口縁:ヨコナデ　底部:回転ヘラ切	指オサエ・ナデ	完存	
17	5区	SD03	最下層	土師器　小皿	8.60	6.00	1.60				細:褐色土粒僅　中:黒色砂粒少	内・外・断:10YR8/1 灰白色	良好	口縁:ヨコナデ　底部:回転ヘラ切	ナデ	口縁2/3欠	
18	5区	SD03	最下層 砂礫層	土師器　小皿	8.60	5.00	1.25				中:長石僅	内・外:10YR8/2灰白色　断面:10Y8/1灰白色	良好	ナデ　底部:糸切り痕	ナデ	4/5	
19	5区	SD03		土師器　小皿	7.85	6.00	1.15				粗:花崗岩風化粒僅 中:長石僅　細:黒色砂粒僅	内・外:10YR8/3浅黄橙色　断:10YR8/2灰白色	良好	口縁:ヨコナデ　底部:回転ヘラ切	ナデ	完存	
20	5区	SD03		土師器　小皿	8.50	6.10	1.20				中:赤色土粒僅　中:石英僅　細:長石僅	内:7.5YR8/1灰白色　外:10YR8/1 灰白色　断面:7.5YR6/4にぶい橙色	やや不良	口縁:ヨコナデ　底部:回転ヘラ切	ナデ	口縁1/4欠	
21	5区	SD03		土師器　小皿	8.20	4.80	1.50				細:褐色砂粒僅　細:黒色砂粒僅　細:長石僅	内:10YR8/2灰白色　外:10YR8/3 浅黄橙色　断面:10YR8/1灰白色	良好	口縁:ヨコナデ　底部:回転ヘラ切	ナデ	完存	
22	5区	SD03		土師器　小皿	8.60	5.40	1.15				中:長石僅　中:赤色土粒僅	内:7.5YR8/3浅黄橙色　外:10YR7/2にぶい黄橙色　断面:10YR8/1灰白色	やや不良	ナデ	ナデ	4/5	
23	5区	SD03		土師器　小皿	8.80	6.00	1.20					内・外:10YR7/2にぶい黄橙色 断面:2.5Y8/2灰白色	やや不良	ナデ　底部:回転ヘラ切り	ナデ	1/3	
24	5区	SD03	最下層 砂礫層	土師器　坏		7.40						内・外:10YR8/2灰白色　断面:10Y8/1灰白色	良好	ナデ　底部:回転ヘラ切り	ナデ	1/5	
25	5区	SD03		土師器　坏	13.90	7.20	3.50				中:赤色土粒僅	内・外:10YR8/2灰白色　断面:10YR8/1灰白色	良好	ナデ　底部:回転ヘラ切り	ナデ	1/4	

報文番号	調査区	遺構名	層位	器種	口径(cm)	底径(cm)	器高(cm)	厚さ(cm)	長さ(cm)	幅(cm)	胎土	色調	焼成	外面調整	内面調整	残存率	備考
26	5区	SD03	下層	土師器　椀		6.15					中:石英僅	内・外:10YR7/2にぶい黄褐色 断面:N3/暗灰色	やや不良	ナデ	ナデ	3/5	
27	5区	SD03	下層	土師器　椀	13.25						中:石英僅	内・外:10YR8/2灰白色　断面:7.5YR7/2灰白色	やや不良	ナデ	ナデ	口縁1/6	
28	5区	SD03	11層	土師器　椀	13.30	6.10	4.50				細:石英少　細:長石僅	内・外・断:10YR8/2 灰白色	良好	口縁:ヨコナデ　体部:ヨコナデ(押圧) 底部:ヨコナデ	口縁:ヨコナデ　体部:ナデ　底部:ヨコナデ	完存	吉備系土師器椀
29	5区	SD03	下層	瓦器　小皿	8.00	−	1.60				細:長石僅	内:N4/灰色　外:10Y4/1灰色 断面:7.5Y7/1灰白色	良好	ナデ	ナデの後にミガキ	2/3残存	
30	5区	SD03	下層	瓦器　小皿	10.80		1.90				細:長石僅	内・外:N4/灰色　断面:7.5Y 7/1灰白色	良好	ナデ	ナデ　ミガキ	1/8	
31	5区	SD03	下層	瓦器　小皿	8.55	5.40	1.30				中:長石僅	内・外:N3/暗灰色　断面:N7/灰白色	良好	ナデ	ナデ　ミガキ	1/3	
32	5区	SD03	下層	瓦器　小皿	9.60	5.50	1.10				中:長石僅	内・外:N4/灰色　断面:7.5Y8/1灰白色	やや不良	ナデ	ナデ　ミガキ	3/4	
33	5区	SD03		瓦器　小皿	7.50	3.00	1.30				中:長石僅	内・外:N4/灰色　断面:N8/灰白色	やや不良	ナデ	ナデ　ミガキ	1/4	
34	5区	SD03		瓦器　小皿	7.50	6.00	1.10				中:長石僅	内・外:N4/灰色　断面:N8/灰白色	良好	ナデ	ナデ	1/4	
35	5区	SD03	下層	瓦器　碗	13.40	4.20	3.75				中:石英僅　中:長石僅	内:N3/暗灰色　外:N4/ 灰色 断面:2.5Y8/1灰白色	やや不良	ナデ	ミガキ	1/3	和泉型
36	5区	SD03	下層	瓦器　碗		4.40	1.50				細:長石僅	内・外:N4/灰色　断面:N8/灰白色	やや不良	ナデ	ミガキ	底部1/2	
37	5区	SD03	下層	瓦器　碗	13.20		3.70					内・外:2.5Y4/1黄灰色　断面:2.5Y7/1灰白色	やや不良	ナデ	ミガキ	1/6	
38	5区	SD03	下層	瓦器　碗	16.00	6.70	4.60				細:長石少	内・外:N4/灰色　断面:7.5Y 7/1灰白色	やや不良	ナデ	ナデ　ミガキ	口縁1/6	
39	5区	SD03	下層	瓦器　碗	16.60		4.20				中:石英僅	内:5Y8/1灰白色　外:5Y6/1灰色　断面:5Y8/1灰白色	不良	ナデ	ナデ　ミガキ	1/9	
40	5区	SD03	下層	瓦器　碗	15.20		3.20				中:石英僅	内・外:N4/灰色　断面:7.5Y 7/1灰白色	やや不良	ナデ	ナデ　ミガキ	口縁1/8	
41	5区	SD03	下層	瓦器　碗	18.00	4.70					細:長石僅	内・外:N3/暗灰色　断面:7.5Y 7/1灰白色	やや不良	ナデ　指オサエ	ナデ　ミガキ	1/4	
42	5区	SD03	下層	瓦器　碗	15.00							内・外:N3/暗灰色　断面:N8/灰色	良好	ナデ	ナデ　ミガキ	1/5	
43	5区	SD03	下層	瓦器　碗	16.20						中:長石僅	内:2.5Y6/1黄灰色　外:5Y5/1灰色　断面:2.5Y8/1灰白色	やや不良	ナデ	ナデ　ミガキ	口縁1/4	
44	5区	SD03	下層	瓦器　碗	16.00							内・外:N4/灰色　断面:N8/灰白色	良好	ナデ	ナデ　ミガキ	口縁1/4	
45	5区	SD03	下層	瓦器　碗		4.60					中:褐色土粒僅	内・外・断面2.5Y7/1灰白色	やや不良	ナデ	ナデ　ミガキ	底部1/3	
46	5区	SD03	最下層	瓦器　碗	16.60	4.40	3.95				粗:石英僅	内・外:N4/灰色　断面:7.5Y7/1灰白色	やや不良	ナデ	ミガキ	1/8	
47	5区	SD03	最下層 砂礫層	瓦器　碗	15.40						中:長石僅	内・外:N3/暗灰色断面:7.5Y8/1灰白色	やや不良	ナデ	ナデ　ミガキ	口縁1/4	
48	5区	SD03		瓦器　碗	15.50							内・外:5Y4/1灰色　断面:5Y8/1灰白色	良好	ナデ	ナデ　ミガキ	1/8	
49	5区	SD03		瓦器　碗	14.80						中:長石僅	内・外:N3/暗灰色　断面:N8/灰色	良好	ナデ	ナデ　ミガキ	1/8	
50	5区	SD03		瓦器　碗	14.00							内:N6/灰色　外:N3/暗灰色 断面:7.5Y8/1灰白色	良好	ナデ	ナデ　ミガキ	口縁1/4	
51	5区	SD06		土師器　小皿	7.80	5.90	1.70				中:石英多	内:10YR7/2にぶい黄褐色 外:2.5Y7/2灰黄色　断面:10YR7/2にぶい黄褐色	良好	ナデ　底部:回転ヘラ切り	ナデ	1/3	

報文番号	調査区	遺構名	層位	器種	口径(cm)	底径(cm)	器高(cm)	厚さ(cm)	長さ(cm)	幅(cm)	胎土	色調	焼成	外面調整	内面調整	残存率	備考
52	5区	SD06		土師器　坏	16.80	8.60	3.40				中:長石僅　中:褐色土粒僅	内:7.5Y8/4浅黄橙色　外・断面:7.5YR6/4にぶい橙色	やや不良	ナデ	ナデ	1/4	
53	5区	SD06		瓦器　小皿	9.10	6.80	1.20				中:長石僅	内・外・断面:N3/暗灰色	良好	ナデ	ナデ	1/3	
54	7区	SD10		土師器　椀		6.20						内・外:7.5YR8/3浅黄橙色 断面:7.5YR8/2灰白色	やや不良	ナデ	ナデ	底部1/4	
55	11区	SD12		土師器　小皿	9.10	6.60	1.40				中:長石僅	内・外:7.5YR8/3浅黄橙色 断面:7.5YR8/1灰白色	良好	ナデ　底部:回転ヘラ切り	ナデ	2/5	
56	11区	SD12		瓦器　小皿	9.60	5.40	2.10					内・外:N3/暗灰色　断面:N8/灰色	良好	ナデ　底部:回転ヘラ切り	ナデ	2/5	
57	14区	SD14		土師器　小皿	8.80	5.50	1.30				細:長石少　中:石英少 細:赤色土粒僅	内:10YR8/3浅黄橙色　外:10YR8/2灰白色　断面:7.5YR8/3浅黄橙色	やや不良	口縁:ヨコナデ　底部:回転ヘラ切	ナデ	ほぼ完存	
58	14区	SD14		土師器　小皿	8.20	3.80	1.50				中:石英僅	内:10YR8/2灰白色　外:2.5Y8/2灰白色　断面7.5Y8/2灰白色	やや不良	ナデ　底部:回転ヘラ切	ナデ	1/6	
59	14区	SD14		土師器　坏		7.80					粗:白色粘土塊少　中:長石少　粗:褐色粘土塊僅	内:10YR5/2灰黄褐色　外:5Y5/2灰色　断面:5YR6/4にぶい橙色	不良	ナデ	ナデ	底部残存	古墳時代か
60	14区	SD14		土師器　椀	12.40	4.60	3.50				細:長石少	内:10YR7/2灰白色　外:5Y8/1 灰白色　断面:2.5YR7/4淡赤橙色	不良	ナデ	ナデ	口縁1/3欠	
61	14区	SD14		土師器　椀		6.00					中:石英僅	内・外・断面10YR8/2灰白色	やや不良	ナデ	ナデ	底部2/5	吉備系土師器椀
62	14区	SD14		土師器　飯蛸壷							中:長石少	内・外:2.5Y7/2灰黄色　断面:2.5YR4/2にぶい赤褐色	良好	ナデ	—	紐部のみ	
63	14区	SD14		須恵器　広口壷		10.00	3.20				中:石英僅	内:N7/灰白色　外:N6/ 灰色 断面:N7/灰白色	やや不良	ナデ	ナデ	底部1/5	
64	14区	SD14		須恵器　広口壷		8.60					中:長石僅	内・外:N6/灰色　断面:N7/灰白色	良好	ナデ	ナデ	底部1/2	
65	14区	SD14		須恵器　甕							中:長石僅	内:N6/灰色　外:N4/灰色　断面:N7/灰白色	やや不良	頸部:ヨコハケ・ナデ 肩・体部:タテハケ・ナデ	ナデ	頸部1/6	
66	14区	SD14		須恵器　こね鉢	25.20						中:長石僅	内・外:N6/灰色　断面:N7/灰白色	良好	ナデ	ナデ	口縁1/8	
67	14区	SD14		瓦器　碗	13.30							内・外:5Y4/1灰色　断面:N8/灰白色	良好	ナデ	ナデ　ミガキ	1/8	
68	14区	SD14		瓦器　碗	16.40	4.80	4.20				細:長石僅	内:N4/灰色　外:N3/灰色　断面:5Y5/2灰白色	やや不良	ナデ	ナデ　ミガキ	3/4	
69	14区	SD14		瓦器　碗	16.80	5.00	4.50				中:石英僅	内・外:N4/灰色　断面:N8/灰色	やや不良	ナデ	ナデ　ミガキ	1/8	
70	14区	SD14		瓦器　碗		4.80					中:褐色土粒僅	内・外:N4/灰色　断面:N8/灰白色	良好	ナデ	ナデ　ミガキ	底部	
71	4区	SX01		土師器　高坏							中:長石僅　中:褐色土粒僅	内・外:10YR5/2灰黄褐色 断面:10YR6/2灰黄褐色	やや不良			頸部のみ	
72	4区	SX01		瓦器　小皿	8.00	4.00	1.40					内・外:N4/灰色　断面:N8/灰白色	良好	ナデ	ナデ	2/5	
73	7区	SX05		土師器　広口壷							中:長石僅	内:2.5Y7/3浅黄色　外:10YR7/4にぶい黄橙色　断面:2.5YR5/6明赤褐色	不良	タテハケ　ナデ	タテハケ　ナデ　底部:指オサエ	底部3/5	土器1(図5) 古墳時代前期
74	7区	SX05		土師器　広口壺	19.40							内:10YR6/2灰黄褐色　外:7.5YR6/3にぶい褐色　断面:10YR6/1褐灰色	良好	頸部:タテハケのあとナデ　口縁端部に沈線	ナデ	口縁1/4	土器3(図5)下川津Ⅳ　古墳時代初頭
75	7区	SX05		土師器　甕	15.60						中:長石僅	内・外:7.5YR6/3にぶい褐色 断面:10YR6/2灰黄褐色	良好	タテハケ　頸部にヨコナデ	ケズリ	口縁と肩部1/8	古墳時代前期

報文番号	調査区	遺構名	層位	器種	口径(cm)	底径(cm)	器高(cm)	厚さ(cm)	長さ(cm)	幅(cm)	胎土	色調	焼成	外面調整	内面調整	残存率	備考
76	7区	SX05		土師器　甕	15.40						中：長石僅	内：2.5Y6/2灰黄色　外：2.5Y黄褐色　断面：2.5Y7/3浅黄色	良好	1次タテハケ　2次ナナメハケ　口縁端部～頸部にヨコナデ	ナデ	1/4	土器2(図5) 底部外面のナナメハケは他のハケメより単位の小さいものを使用している.
77	4区		包含層	弥生土器　広口壷	29.20						中：長石僅　細：黒色砂粒僅　細：褐色土粒	内・外・断面10YR8/3浅黄橙色	やや不良	ナデ	ヨコナデ	口縁1/8	中期後葉　頸部に沈線あり
78	14区	撹乱	上面	弥生土器　広口壷	－	－	－				細：長石僅　細：黒色砂粒少　中：花崗岩粒僅	内：2.5Y6/2灰黄色　外：10YR7/3 にぶい黄橙色　断面：10YR4/1褐灰色	良好	口縁：ナデ　頸部：タテハケ・ナデ	口縁：ナデ　頸部：ナナメハケをナデ消している	口縁と頸部1/3残存	弥生時代中期頸部にタテハケ調整後に貼付突帯、その上を刻み目を入れている。
79	4区		包含層	土師器　焙烙	22.00						中：長石僅　中：石英僅	内：7.5YR8/4浅黄橙色　外：10YR7/4にぶい黄橙色　断面：5YR8/4淡橙色	良好	ナデ	ヨコハケ　ナデ	口縁1/5	外面に2次焼成あり
80	12区		包含層	土師器　飯蛸壷	－	－	5.30				中：石英少　中：長石並　中：褐色土粒少	内・外：10YR6/3 にぶい黄褐色　断面：5YR3/6	良好	ナデ	指オサエ・ナデ	1/3残存	中世
81	12区		包含層	十瓶山窯　こね鉢	－	13.00	10.00				中：石英僅　細：黒色砂粒少　粗：黄色粘土粒僅	内・外・断：7.5YR5/1 灰色	良好	板ナデ	横板ナデ	1/6以下	
82	4区		包含層	平瓦				1.65	10.30	8.35	中：石英少　中：長石少　中：褐色土粒僅	内：2.5Y7/2灰黄色　外：2.5Y7/2灰黄色　断面：2.5Y6/3 にぶい黄色	良好	板タタキ	布目タタキ	約1/4残存	布目瓦
83	12区		包含層	平瓦				2.70	11.50	8.60	中：石英僅　中：長石僅	内：10YR7/2にぶい黄橙色　外：10YR7/3 にぶい黄橙色　断面：10YR6/2灰黄褐色	良好	板タタキ	布目タタキ	約1/4残存	布目瓦

第３表　石器観察表

報文番号	調査区	遺構名	層位	器種	直径(cm)	厚さ(cm)	重量(g)	石材	備考
S-1	14区	SD14	最上層	紡錘車	3.95	1.35	32	滑石	風化が著しい

第４表　金属器観察表

報文番号	調査区	遺構名	層位	器種	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	材質	備考
M-1	5区		包含層	鉄釘	5.25	0.8	0.8	鉄	
M-2	14区	撹乱		板状鉄製品	6.7	2.9	0.5	鉄	鉄鎌か

写　真　図　版

図版１　３区　SE01　西から

図版２　５区　SD03　南から

図版３　７区　SD10　南から

図版４　11 区　SA03　東から

図版 5　14 区　SD14　東から

図版 6　出土遺物(S-1 石製紡錘車)

報 告 書 抄 録

ふりがな	みなみがもいせき
書名	南鴨遺跡
副書名	平成24年度多度津町内で実施した遺跡調査報告
巻次	
シリーズ名	多度津町内遺跡発掘調査報告書
シリーズ番号	1
編著者名	白木亨
編集機関	多度津町教育委員会
所在地	〒764-8501　香川県仲多度郡多度津町栄町1－1－91　Ｔｅｌ：0877－33－0700　Ｆａｘ：0877－33－0600
発行機関	多度津町教育委員会
発行年月日	西暦2014年3月31日
総頁数	

所収遺跡名（ふりがな）	所在地（ふりがな）	コード		北緯 °′″	東経 °′″	調査期間	調査面積	調査原因
		市町	遺跡番号					
南鴨遺跡（みなみがもいせき）	香川県仲多度郡多度津町南鴨（かがわけん なかたどぐん たどつちょう みなみがも）	37404	0041	34° 16′ 14″	133° 46′ 2″	20120719～20120731 201214 20130110～20130117	388.87㎡	宅地造成

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
南鴨遺跡	集落跡	弥生時代中期		弥生土器	
		古墳時代後期	掘立柱建物 溝状遺構	土師器　須恵器　紡錘車	灌漑用水路
		奈良時代～平安時代	掘立柱建物 柱穴跡 溝状遺構 溜井 土坑	土師器　須恵器　布目瓦 黒色土器	条里の坪界溝を検出
		中世以降	掘立柱建物 溝状遺構 柱穴跡 井戸	土師器　須恵器　瓦器	吉備や機内からの搬入品あり

要約	丸亀平野西部の弘田川と金倉川の間にある低位段丘上に位置する。集落を構成する建物跡や住居跡の痕跡は少ないが、古代以降の条里地割に沿った坪界溝を検出。また遺跡の周囲は中世の堀江庄と**葛原**庄があり、溝の中から多量の瓦器が出土していることから、中世段階の京都の下鴨神社の御供田として荘園が広がっており、中世段階の湊に隣接する地域として、小規模な建物群を点在させた集落遺跡である。

多度津町内遺跡発掘調査報告書 1

南鴨遺跡

平成 24 年度多度津町内で実施した発掘調査報告

平成 26 年 3 月 31 日　発行

編 集･発 行　多度津町教育委員会
香川県仲多度郡多度津町栄町 1-1-91
印　　刷　（有）西山印刷所